川柳雑誌

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十二年六月一日發行　第十四卷第六號（毎月一回一日發行）

NO. VI VOL. XIV

推奨　楢林醫學博士
監修　片瀬醫學博士

ワダカルシユーム錠

安産のために

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる姙娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護奬勵に任じ、惡阻期を安全に經過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますからお産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豐富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髪、歯牙の惡化を防止し、乳兒も隨つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀬醫學博士述「安産のために」進呈

代時ムーユシルカを設建てし

茲に二十年、幾十萬の姙産婦諸姉が、「ワダカルシ」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシューム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀬博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の地域を築き得ました事は弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシューム錠」

大阪道修町　和田藥品商店

川柳雑誌

第十四巻　第六號

不朽洞句稿

麻生路郎

子が死んで葱や菜ッ葉の乳母車

前家賃庭に八つ手があるばかり

とろろ昆布しほこぶ闘志衰へず

情痴の果てのひとり飯炊く

父・植木・小鳥・娘はうちにゐず

川柳雜誌　六月號目次

題字・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……麻生路郎…(一〇)
川柳壇無能論……藤村亞鈍…(一二)
武玉川三編研究（六）……梅本秋の屋・森東魚・姪子省二…(二九)
山中說法……福田山雨樓…(一四)
桃太郎さん……西田艸樂…(一六)
感激が生む句（川柳指導講座）……塚越正光…(二五)
漫畫セクション　六月まんが　オサカ・マンガ・トリオ……小川武男・甲貝スミ・北幹夫…(三三)
行路集（短歌）……長野晴濱…(三六)
喫茶店のAとB（職業川柳人問題）……(三三)
青風の流れ……安川久留美…(一四)

認識……石田沐天…(一六)
川・協・の・頁……川柳人協會…(一九)
青空の下の句會……(二四)
川・柳・書・架(六六)……(四四)
川柳横町……不死鳥…(三四)

創作

不朽洞句稿……麻生路郎…(一)
川柳塔……綠雨、丹路、かほる、壺乃、鮎美、青兒、豆秋、新水、白峯、民郎、いわを、八歩…(三八)
變人、おさむ、ライト、柳秀
近作・柳樽……麻生路郎選…(四)
日本名所名物川柳(京都の巻)……山川紫明選 朝賀大鱗畫…(三)

一路集

袂……榎田珍竹林選…(四四)
食堂……永田里十九選…(四五)

各地柳壇……(四八)

柳界展望……(三七)
柳誌要目……(五二)
編輯縱横……(五三)

社關係の人々……(五六)
川・雜・案・内……(五四)
坊やの雨?(漫畫)……幹夫…(二四)

近作柳樽

麻生路郎選

集金もしづまるを待つ灰神樂　大阪　柳大門

別の橋渡る父見ゆ太皷橋　同

堪忍に手の鉛筆は折れてゐる　同

狸寢が有利になつて動き出し　同

乘合の顏に見られる朝戻り　同

お上りももう鴻池見には來ず　同

新聞は時めく人を素ッ破抜き　今治　長野文庫

成功をして卷頭に書く會誌　同

圓本の中で讀んだは二三冊　同

本代と云ふを母親信じきり　同

分不相應の立讀み睨まれる　同

病氣には勝てず一票無駄にする　奈良　嶋田翠峰

猫も來て水掛論へ欠伸する　同

見下せば蟻とおぼしき爭議團　同

曲解の友の心に觸れて見ず　大阪　畑田よし江

反省は今日一日を靜かにし　同

外交の氣持もあつて電話口　同

貰ひ兒を取り戻されて日脚伸び　豐中　阿部閑生

春ショールテープの切れが纏ひつき　同

神風に基隆沖で追ひ越され　同

室きめてしよんぼり待てる旅鞄　同

放り出された猫屋根で顏洗ふ　今治　渡邊曉童

引づられながらに春の氣に浸り　同

頰杖へ蛙こちらへ向き直り　同

町の夜はいたく更けたり稻荷ずし　同

カフスボタンも思へば久し六年目　同　渡邊都留逸

筍と猫としづかに留守をする　同

アパートに一夜を越した稻荷ずし　同

涙二氏來訪

珍客に早明戰を輕く切り　大阪　山本葉光

憎まれぬやうに春病む不甲斐なさ　同

自轉車を盜られてゆれるバスに乘り　同

荷車が何日も軒借る貸家札　今治　石手河鹿

何處の子ぞ本讀む節で誘ひに來　同

誰がどう呑ました既に女給醉ひ　同

誘惑も良しと思へり春の宵　愛媛縣　月原宵明

外交のしばし早稻田を賞めておき　同

私の誕生

二十八少し手傷も負うてゐる　同

曾我廼家に泣く涙あり貸さぬなり　大阪　山本三巴

雪洞に醬油の名藥の名　同

草臥れて歸れば疊火の如し　同

脈搏の枕にうてるもの想ひ　兵庫縣　林朔風

座蒲團をすべつて初の御挨拶　同

傘干してからよし〳〵と抱き上げる　同

味のない蒟蒻もよし花見酒　兵庫縣　田邊由布

郊外の春をゆる〳〵肥車　同

薄のろの唄が冴えてる晝の風呂　同

ブレイガイド一人は先に待つてゐる　大阪　正本水客

神經にさはる話を笑ろてする　同

兩足をそろへて笑ふ女なる　同

湯の中の貴兄鹿兒島僕は伊豫　松山　芝田靈子

旅行用トランク女の手にあまる　同

空ひろし海ひろし旅幾日　同

このつぎは何で呑まうか藤の花　今治　荒井英賀夫

紫雲英牛に食はれるのもありて　同

二人連錢湯にまで二人連　同

湯と書いた方も水なり顔洗ふ　愛媛縣　今井　椋影

靈あらば聞けとはせめてもの言葉　同

聯想が恐い場面へ落ちつかせ　廣島　濱田久米雄

父と子の酒が無言のまゝに盡き　同

ポスターは破れしまゝに落選し　島根縣　勝部　海棠

子を失へる好郎君へ

鯉幟見上げて君の瞳はうるみ　同

窓口は使へぬ金へ眼が疲れ　大阪　今井　菊路

煙草の火煙草で借りる麗かさ　同

淸き一票哀な程の頭下げ　朝鮮　弘津　慶一

日曜だ春だ二階でゴロリ寢る　同

奥様の歸りが遲い鳩時計　大阪　馬淵　龍城

ポスターもさくらさくらの春の驛　同

ホルモンの話隱居のひるの風呂　尼崎　酒井　斗風

相談欄女史もさびしい未亡人　同

庭園師賣る迄の木の庭に住み　大阪　秋山　古心

三人に氣兼な席が一つ空き　同

參拜のついでに花の見える寺　同　北川　春巢

氣の利かぬ頭優等取つて來る　同

嬉しさへ話はあとや先になり　石川縣　松本　文太

一笑にふしてる多額納稅者　同

平熱を體温計に感謝する　京都　福田　丁路

無雜作に坪千圓の土地を掃き　同

新綠へ賣る物も無き我生活　尼崎　山田南濃路

制服の處女の氣高きビルの窓　同

流行唄男一匹それで生き　大阪　石田　沐天

矢面に髭の在所の淋しくて　同

去年來た嫁も混つて最合井戸　名古屋　稻垣　正穗
逆境の久し珠算塾ひらく　同
別莊の機械體操錆びたまゝ　大阪　大阪　形水
頬突けば笑顔を見せる百日目　同
此頃は借ること多し子の貯金　廣島　黑本　芳泉
二三日も喰はせぬ樣に中風云ひ　同
ひとり者リュツクを肩に拔いてゆく　大阪　千種　豊
いとほしの君はレンズに横をむき　同
ポケットのお手にさはつたマツチ箱　大阪　庄司淡路坊
打ちましたビツトヒツトに立ち止り　同
片側をせまく女のびつこ行く　愛媛縣　由利　孝輔
惜まれて〳〵テープ波に落ち　同
家庭欄女としての眼を通し　名古屋　内田　元子
葉櫻の匂ひに和む二人連　同
弱心を吐つてゐるはコツプ酒　大阪　岩橋　岩石
躍動をする心臓も春の音　同
煉炭の穴を崩して寢るときめ　丸亀　馬場　涙二

切り荒す雜木の中に見る櫻　同
盛り場の一夜だんびら振りかざし　高松　石塚春帆子
道連れになつて札所も程近く　同
報告をしても責任まだつきず　愛媛縣　宮崎　琴水
エプロンのまゝで女中は茶も習ひ　同
大命にシルクハツトの今日の艶　大阪　富本　無煙
泥はいて差入べロリ平げる　同
紋服で來た緊張を酒で缺ぎ　愛媛縣　笠崎虹絮子
珍客を隅に立たせて布團しく　同
落ちさうにマスクをかけていゝ婦人　栃木縣　寺田　宗正
告白に似た日記燒く退院日　同
明日からは止めるビールの泡の味　廣島　鳥生　枯佛
行きつけの向ひにまたも喫茶店　同
いつまでも生きてゝ欲しかゆをたき　大阪　岡田　玫瑠
極道の果てに落ちつく家を持ち　同
丸髷でマダムの戀は憚らず　長野縣　高峰　柳兒
まぶたの父などゝは不義のなの果て　同

母親が教へたらしい兒の手紙　大阪府　黒川　紫香

邪魔な荷が暫くのかぬ測量機　同　松浦　一鴻

背廣着て春のカメラの人となる　島根縣

目的の半ばであける貯金箱　同　金井　串郎

新藥の効めだん〳〵忘れられ　大阪

先に見ておけばよかつた告知板　同　富本　無煙

眞直ぐな伸針の白い新世帶　大阪

直立の氣球へ旗は皆默り　同　靜　子

死んだ子の話にふれる鯉のぼり　同

ふるさとの便りへすまぬ牡丹刷毛　同　米原　木馬

煩悶は火のないバット嚙んでゐた　島根縣

一五〇瓦のはぎへ月日を書いておき　同　佐二木千隈

子を連れて一足おそい神詣り　長野縣

宿替のその夜蓄音機をかけて　大阪　川村　觀月

愛情を鼻で表はす犬を抱き　高松　松永　廉夫

見え透いた嘘を善人もてあまし　大阪　八田　鐘生

春空に高く生み出せ黑けむり　岡山縣　原　美靜流

青春に疲れ初夏にも疲れてる　大阪　高畑案山子

防水着土間のせまさを笑ふなり　靜岡　長島　柳坊

合格の手柄話を泣いて聞き　大阪　泉　流葉

月給の不足が云へる若さなり　尼崎　坂井　正胤

諸かつた晩は丁稚へすしが出る　大阪　米林　舞蝶

山麓を行く汽車雨が細いなり　石川縣　西島　本樓

徵兵檢査迫る

非常時に生きる吾腕撫でられる　大阪　高磯　銀濤

此邊で自殺をしたとビルの下　長野縣　林　幹

御見事な鼻で儲けてゐる仲居　大阪府　宮岡　公子

惡友は心の動き見逃さず　島根縣　森山さわだ

唇を焦すバットを捨ておしみ　大阪　大　佛

なまけまいと決め最後の書寢する　廣島　野田　昇玉

ハイキング天氣豫報に耳を立て　大阪府　大島　石艸

子にだけは出世させたい父の夢　今治　青野悅太樓

河豚刺身命を的に喰べちやつた　高松　揚　柳夢

新芽野に道化の一人話しおり　尼崎　屋代　青子

憧れの夢へ夜汽車の音もする　石川縣　山崎晴嵐

角帽などかむり見舞に來てくれな　豐中　金田亜木

沈み行く家名姑息に生きて居る　松本　名越新革

一萬圓出せば名士となれるなり　堺　西村曲豆

猫追ふて晝寢そのまゝ起きて來ず　今市　伊藤佛心

屁を放つた犯人の顏殺氣立ち　大阪　金丸隼人

○

逐號句がよくなつてゆくのでゆかいである。本欄の雄、大門君は「別の橋」「勘忍に」「狸寢が」にいよ〳〵その腕の冴えを見せた。文庫君は毎號書籍に關する句が優れてゐる。雅號が文庫商實が本屋なるほどとうなづける。翠峯君の「見下せば」は痛烈。よし江君の句では「反省は」かいゝ。閑生君の「貰ひ兒を」はやるせない日を送つてゐる心境が靜に出てゐる「神風に」は最近臺灣へ旅行されてゐたので强く響く。「室きめて」のよさは遠く旅したものでなければ判らないかも知れぬが旅愁をしみ〴〵感じさせられる句である。曉童君も都留逸君も稻荷ずしの句によさを見る。葉光君の「憎まれぬやうに」は病床吟として同情をそそるに足る。同じく病床組の亜木君に『角帽など』の佳吟がある。胸を病む身に學友の見舞は反つて痛みを感ずるだらう。三巴君の「曾我廼家に」の句はけだし苦勞人の句である。實感かも知れぬ(路)

川柳指導講座

講師　塚越正光先生

本社の指導講座は平易懇切、全く手を取らんばかりにしての講座振りです。川柳を作りたいが、どうしたらいゝかと迷つてゐる閑に、五七五中心に、課題によつて作り、本講座へ送られるが捷徑です。講師はこの道の苦勞人、塚越正光先生です。

課題「枕」一人一句

締切　六月廿日

發表誌　八月號

投句　本社宛

「川柳指導講座句稿」と明記する事

川柳名句評釋（11）

麻生路郎

だが矢張り顔はどうでもよくはなし　梅月

結婚の條件に顔なんかどうでもよろしい。とは云つたがホントにどうでもいゝのかいと訊かれると、ぐらつかざるを得ないね。自分が自分に嘘をつかなくてもいゝとすれば矢張りどうでもよくはないのかな。

タイピスト器械の中へあくびをし　半象

華やかであるべき娘時代に貴社愈々御隆昌や高堂益々御清穆などゝいふ字をたゝいて其の日其の日を消してゐる退屈さを諷した句である。「器械の中へ」が特によく利いてゐる。

落付いて見れば女給の低い鼻　夢一文

美給と云ひ麗人と云ふ。鼻の低くからう筈がないのに、それを發見したところに滑稽があり、皮肉がある。

蘇生して藝者の道をまた歩む　有爲郎

敢てその例を辻阪某の愛妓に求めなくてもいゝだらう。生きねばならぬ人間だとすれば。

貨車の牛神戸を指して急ぐなり　新水

時刻は夕暮としておこう。鐵道の沿線に立つてゐるとすぐ目の前をゴトン〳〵ゴトン〳〵と轉がつて行く貨車の一

つ〳〵に牛が載せられてゐる。方向は神戸だ。彼等の運命は想像に難くない。しかも行く途を急いでゐるやうだああ、私達は？と云つた諷刺句。

新世帶ポンプは僕が押してやる　花川洞

蒼白き郎君に申す。いつまでもいつまでもポンプを押してやりたまへ。

おばさんの前身スツパ〳〵喫ひ　呑風

矢ツ張り、そうだつたか。と、みづからうなづいてゐる句。「前身」と云ひ「スツパ〳〵喫ひ」と云うて、それ者の果とすぐに合點させるところが句のいのちであらう。

心得て女給手相を見て貰ひ　松映子

「君はまだ〳〵苦勞するよ。君は既に片親を失つてゐるね」「アラ、ほんとによくあたるわ」と心得たものである。

混血兒のやうな名前で美容院　二若

メイ牛山かな。マリヤ美容院かな。川柳家の神經もなか〳〵こまかくなつて來た。

泊る妓の暫く見てる萩の雨　なみ江

大映しのやうに妓の腦裡をかすめて行つたものは故里の老ひたる父や母ではなかつたか。

對岸の灯が美しい生ビール　白舎

市廳舍も、街路樹も、とゞろに橋を渡りゆく市電までもみんな逆さに映つて夜の大川端が美化されてゐる時、生ビールの味はまた格別である。

今日はいゝ男さ黑の五つ紋　柳多良

新郎の歡喜が五つ紋に躍動してゐる。着想凡にして凡ならずといふ句だ。

慾の無い人間にされあほにされ　矢咲

あんたは慾がないからと一應は褒めてもくれるが、それでいゝ氣になつてゐると、與へられる筈のものさへ與へられない。

川柳壇無能論

藤村亞鈍

「川・雜」へこの一文を草してデビユするさいふ事は、一面僕が文學青年眞い意味で解して欲しい――である點を自ら進んで明らかにしたいからである。若し僕の書く事に蒼白い舌足らずの面麭臭い議論であると貶す者があつたら、僕は彼等に吹つかけてやることがある。御身等は御身等の半生賭けて爲す川柳が一人の文學青年からも身向きされてゐない非文學的價値にこそ自省す可きであると。

御身等が市井の町人根性を持つた無自覺的兒戯的ポヤキ萬歳の安易な阿呆笑ひの支持を受けてゐる限り、川柳は、「キング」や「日の出」のポンチ繪に其存在を殘す以外、正統の文學より永久に除外されたまゝになつてしまうであらう。

文學青年と言へば直に逢髪不孝者とみてしまふのは問題である。田を作らずに詩を作らうとする意慾には、藝術のアポロに憧憬し、歸依しやうとする純粋にして直情的な得難い眞實があるのだ。その爲に世俗的な一切の功利性を捨てゝ省みないさいふ絶對的な境地こそ昂揚さる可きなのである。これ等の青年達が身も心も奪はれるものを川柳に見出す事が出來るであらうか換言すれば川柳の藝術價値に於て、その美に對する高貴性が經驗し得るであらうか。

或ひは僕は僕の對象としてゐる川柳が、現在の進歩的な川柳家からみて妥當をかくものであるかも知れない。未だ斯道に入つて日尚ほ淺い僕は、その柳壇の現在の動向に對し圖り知れない數々の問題があらう。然し、今僕の手先にある柳誌書册を視るに、成程、「番傘」も「昭和川柳」も「川柳研究」も「むさしの」も又「ふあああすと」、「えるすて」も「みすか」もそれ〳〵にそれ〴〵の問題を持ち、主張も見受ける事が出來るけれど、その雜詠欄や、同人欄や、句會報告などに、現れてゐる川柳の作句に、彼等の問題も主張も凡てポヤケてしまつて、尚、その上に、どの柳誌にも同一の名前が見出される風では、理論は理論丈の空轉をしてゐるばかりで、果敢な實踐句の殆ど皆無なのに驚ろき入るばかりである。成程「昭和川柳」や「えるすて」などは比較的、理論と實踐に相俟つものがあるやうであるが、前者のがら〳〵した同人達の勝手氣儘のテンテンバラ〴〵の論法で生活川柳が、囈言川柳になつてしまひ、後者のグルツペの鼻持ならぬモダンボオイのダンディズムは既に文壇の使用ずみのオムツを有難がつてゐるやうで柳壇の笑ひ者である故に、僕の希求するものではない。

凡そ大ざつぱに言つて、現在の柳誌そのものの存在を理由するなら、柳壇それ自身が、卑猥的な川柳のユーモアを感じさせられるのであつて、若し彼等にして眞面目であればある程、喜劇的なパーソスさへ覺えてくるといふのは僕らのやうな川柳の素人にして客觀し得る事柄である。

さて川柳も確に文字藝術である限りは文學である。その發生を江戸時代にみ其角門の慶紀逸が寛延三年に出した「武玉川」初篇をもつて川柳の契機となり、而して柄井川柳が前者の雜俳の前句を篇一たのを今度は附句を獨立せしめて「柳樽」を出して

より以來綿綿として續いて來たところの日本生粋の文學として確立されてはゐるのである。それ故に吾々が一毎び、「武玉川」や「柳樽」を勉強する時は、それは文學的に非常に意義あるものに相違はないけれども僕はこのやうな文學的な價値を求める事は、京大のプロフエッサーとか一部のアカデミーの好尚家にまかして置けば可いので、吾々はそれよりは實際問題として文學に於ける文學する精神、即ち川柳をして、川柳する精神、所謂猿眞似小器用に、チョクツとも物をヒネつて書くといふのではなしに、川柳そのものに身も心も投げ入れやうとする全的な精神を作者が持つ時に始めて文學的な價値を體得する——觀賞し吟味し研究するのでなしに——ことになるのである。斯る熊度を堅持する場合、丁稚が丁稚のまゝで書き、或ひは番頭さんが番頭さんのまゝで書き、商人官吏、會社員、醫者、軍人のまゝでそれ〴〵に書く事にはならないで、川柳する場合は、各々その立場を忘れ川柳家としての矜持と誇りをもつて川柳しなければならない。例へば小説家が小説を書く事によつて小説家であり、畫家が繪畫を畫く事によつて、音樂家が音樂することによつて、畫家であり、音樂家である事は、小説家は小説に、畫家は繪畫に音樂家は音樂によつて生活の絶對價値を認める如く、川柳家は川柳する事によつて、生活の絶對値價を獲得しなければならない。それは決して商人の趣味や音樂でない、萬一商人であるとしたら、商人は二義的な生活の方便であつて、先づ川柳家である事に一義的な絶對的生活を求めなければならないものだ。吾々は斯くする事によつて、巷間の川柳を衆愚から別離し、所謂詩人の手に戻す可きであつたのである。即ち川柳家は川柳家である事によつて川柳の自律性がある。牧師が牧師である事によつて牧師の存在がある如く牧師は決して茶坊主であつてはいけないのである。

以上述べた川柳家の内部革命を提唱すると同時に、僕は柳壇の外部的な運動に就て、即ち、對文壇への進出、挑戰に對する柳友の猛省を促すものである。僕の「川・雜」への起稿は冒頭に述た如く實に最初である。然し、主幹麻生路郎師とは一昔前から面識があつたし、昨今不圖した機會に親しく芳咳に接することを得、昨年より僕も亦川柳人協會の一員として末席を汚してゐる事である。すれば川柳人協會員として僕にも意見もあるし、主張もある。一體川柳人協會の設立に對する全國柳誌の非難、攻撃の馬鹿げた騒ぎはどうした事だ。どれもこれもケツの穴の小さい小兒病的、田舎大名の鮒侍位の豪ばりやうでは決して耳も傾けられないぢやないか「眞面目な批評ならいくらでも受ける」といふ路郎の態度は川柳家にしては一寸珍らしい出來物である。いや川柳家なんて、他人のアラをホジクリ廻す事に窮々としてゐる小人輩は余りに多すぎるのだ。缺點だらけは寧ろ路郎の最も躍如とした人間らしさであつて、師の句は、其故に一等藝術的なのである。政治家で、事業家で、人觸りのよい常識家は大家に成濟まして涼しい顔をしてゐるが句は衆知の如く非常に詰らない。人間が出來て、一分のスキ間のないといつた世情にたけたいはば世情に狎れあつた奴には眞の藝術家は居らぬものである。路郎はよく突飛なことをして柳人輩を驚かすその事柄の良否は別として兎に角、驚ろかすといふ事は、アリストテレスの「詩學」以來の藝術の根本義であつて、師の藝術家としての天性的な素質を物語る

ものである。これは反面、血の氣の多い文學青年と吻合するもので、だから僕は、ただ好きなのである。その路郎師が、昨年來、川柳人協會を設立し、ものしく川雜に書き始めた。規約だとか、綱領だとか、それから會員の特典として、句會の會費割引など凡て、路郎式に、見る者をしてたわいないまでの宣傳である。心寄す者をしてハラ〳〵させられる點のないでもないけれど、僕は師の意中を汲み抹消的な事にぐす〳〵くすぼつてゐる、津々浦々の愚鈍な柳人の迷妄を開發しやうと思ふ。と言ふのは御身らはもつと大局的な所に目を付けよと僕は言ふ。藝術に國境なしといつて言いが現在、邦國の文壇にも、國際ペンクラブが設立されてゐるし、文壇内でも凡ゆるエコールを無視して、作家クラブは設けられ菊池寛氏提唱の文藝合作の基金も文士達の出資で一萬七、八千圓は既に集つてゐるのである。所謂作家共通の利害と得失のために、積極的には、その國家的進出に於て、決して斯る通動は政治的な國際關係や經濟問題によつて、國策にじゆんずる筋合のものでなく、寧ろ文壇のインタナショナルを提唱しつゝあるのである。斯る狀勢下にあるのを、然るに、それらと比して、如何にもちつぽけな川柳壇の思ひ〳〵の竣工を横につながる組織を持たうといふ、柳壇のコスモポリタニズムが路郎師の音頭だからと言つて自眼視するとは何たる事だ。社會の機微を穿つ川柳家にしては餘りに解らなすぎる話だ。川柳家とはもつとさういふ具合に、もと〳〵町人的愚衆であつて、蟻のやうに社會面にへばりつき、這ひまわり、ちよこ〳〵と土壤をほじくり、持ち上げてみたりする日常の現象に浮身をやつし、社會そのものの全體的な動きと底流に眼を濶く事の出來ない輩であるとは情けない次第である。川柳が人間性に即した話であるなら、皮膚面丈をひつくり返す事に究々とするのでなく、人間殊に君らのやうな川柳人の靈肉諸共コペルニクス的轉向を、僕は要請する。そして目下の川柳人全體の急務として、柳壇そのものを、文壇的位置にまで高めるために川柳人協會を通じ、擧つてこの問題に當る可きではなからうかと信ずるのだ。

山中說法

福田山雨樓

奥伊豆の温泉郷下賀茂、伊古奈ホテルはまだ開店して一ヶ月余り、東洋隨一數寄屋殿堂と稱するだけあつて仲々凝つたもの木の香も高く新綠の中の別天地である。

投宿した夜旅の便りを出したことから僕が川柳家であることを知つたホテルの支配人は誰あらう。久良伎門の最古參者金比古翁その人であつた。その夜も次の夜もそのまた翌朝も川柳の話で盡きなかつた。とう〳〵三十名からの一行の殿りとなるまで語り新綠の饗宴を後にした。

劍花坊、鈴ン坊等故人を語る翁は流石に感慨深いものがあつた。

青風の流れ

—市南端へ越して—

安川久留美

親から受け繼いだ遺産のうち時價五〇〇〇圓餘の住宅を大正七年夏、人手に渡してから、既う彼れ是れと二十ヶ年、それから森の都を西に東に借家住居が續いて來た。その間金澤にゐなかつた事は、舞鶴町生活の一ヶ年と四ヶ月。之れとて勤めの社から滯りなく家賃を拂つて貰ひいはば社宅のやうなものだつた

さて久し振りに金澤へ歸つて見ると住宅難、はじめは二階借りの母の許にもぐり込んだが、一戸の構へでなければ不自由とあつて早速犀川畔に適當の家を見つけて落ちついたが、之れも都合で一ケ月は居らず、ツイ近所に安い貸家を見つけ「ちと暗いが我慢しやう」と引越して此方二ケ年の星霜は一ト走り「いやいや」で暮したものの晝夜燈を點げねばならぬ陰氣くさゝと薩張り・繕ひもせぬ判らずやの家主に愛想をつかして五月一日スピードに移つたのは金澤でも南端で、もう郊外に近い「石坂與力町」とうふ珍名の町である名の如く昔は與力がズラリと住んでゐたものか？　今は「野町驛」といふ電車の終點を降りて約一町餘、正一位稻荷大明神のまします横通りといへば判り易い所、家を出て見付けの小路を半丁も行けば「電車に注意！」の標柱があつて、そこは松任へ行く電車線路、向ふは靑々とした田圃だから、朝の空氣も淸々しい、この先ゐた家は成程犀川の大川も近く、夏は涼しい風をうけたが、螢スイ〳〵飛ぶ小川のほとりから蛙の鳴く聲を聞く郊外氣分も又捨て難いもの「住めば都」とわれから悅に入つて腰をすゑたはいゝとして、さていゝ事のみは二つ無い管への通り、近所にある大きな機業場の機械の音が終日ガチヤリ〳〵、朝から夕方まで公休日の他はとても靜かな氣分を味はせてくれない。私の句に

◎終點を少し歩けば萩が咲き

の舊作はあるが、なか〳〵の延長せざる小都會の終點は萩どころの風雅はなく、今のところ「終點を少し歩けば機の音」といふ驅々しさである。然し珍しい事は金澤人になつて三十五年目に始めて水道の栓をひねる生活をする。つまり之れ迄はいづくも井戸水のある家ばかりに住んで來たから別に水道使用代を拂ふ事はなかつた、之れとても文化が齎した水、と思へば、あえて不平を漏らす可からず、だが夏はぬるくなる水に顏を洗つてゐてはとても

◎秋の水顏を
　洗つてゐる自分

といふが如きすつきりした秋の句も生れて來ない。森の家君の舊作「水道の栓はひねつて見て居れず」といふ感じばかりする。とまれ成金にもなれず、再び家を求める程の成功もせず、いつ迄續く借家住居か、森の都の晝月空にへんぽんと泳ぐ眞鯉緋鯉の紙のぼりを眺めて、げに人生を考へてゐると三十年間の川柳生活は何かを諦觀させてくれた

「俺は何處へ行く」？

路郎先生の印象句

◎二階を降りて
　何處へ行く身ぞ

それでよい、さうにちがひない蝸牛生活の二階を降りて、大きな世界の一隅で眼に見えぬ、生

麻生路郎編著・柴舟漫畫
累卵の遊び
四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉
定價壹圓
特價八拾錢
送費九錢
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摂り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である
大阪市西成區玉出本通三ノ三六
發行所　不朽洞
振替口座大阪三〇三九二

存の戦争をしてゐるのだ。片道の電車賃やバス賃を省いて白日下の鋪装道を日和下駄鳴らして歩くといふ「經濟」すら生存競争の一部であらう。森の都は皐月晴れ、緑の香は窓外に溢れて市端に住む者へ満足させてゐる

（五月五日記）

認識

石田沐天

「人間と氣附いて見るも面白し」古豪北山悟郎氏の句、此の句を味はつて見給へ所栓は人間だ、人間なるが故に面白いものである良いことも悪いことも其れが人間だ。只だ程度の問題に遠ひないその程度もまた老衰した文字だが『認識』の有無にある。それ故にこれ故に默視してゐるばかりが人間ではない理由が此所に在る。川柳は『詩』？等と語つてをられる方々には縁遠い話かも知れないが、それらの方々も『人間と氣附いて』自分自身でもよい過去、現在、未來を想ふとき『面白いもんやな……』と感じたならば、その人の作つた川柳は即ち『詩』ではないか、その詩人たる者が事の不認識に（敢てなす者を除く！）終りながら社會を川柳界を濁しつゝ歩く一生であるなれば誠に御同情に堪えないものがある。

桃太郎さん

西田艸樂

先般名古屋の全國川柳人交驩大會があつて、そのプログラムの一つに日本ライン遊覽が入れてあつたから出席者はその日本ラインの一名所である桃太郎神社を知られた事と思ふ。私は豫て旅行の計畫があつたし、他に支障もあつて、交驩大會には出席し得なかつたが、先日旅行の途次日本ラインへ立寄つた。

四五年前にライン下りをした私には格別珍らしい處ではなかづたが、愚妻を携へてゐたのでつきあひに、犬山から舟を雇つて、少し遊んで見た。

犬山橋から十八丁上手の、川の左岸に桃太郎の里がある。桃太郎屋敷だの、桃太郎神社だのがあつて、以前ライン下りの時は、船頭から桃太郎の生れた處だと聞いたが、フヽンと鼻であしらつたまでだつたが、今度はその屋敷を訪ひ、神社にお詣りをして見た。

御承知の通り、日本ラインは鬼ヶ島の岩屋を想はす奇岩重疊のいゝ景色である。その一箇所を撰んで桃太郎の里とはよく出來たと感心して舟から上つて訪ふたのである。雉子ヶ峰と呼ばるゝ山の裾に小さな神社があり屋敷跡と呼ばるゝ今は遊園地がある譯だが、雉子ヶ峰には夕方になると雉子が舞ふそうで、山には野猿が戯れてゐるそうで下手には犬山があり、童話桃太郎を造り上げるは道具が揃つてゐる。それにもう少し昔噺に確證を與へる爲に、屋敷跡に洗濯岩といふかなりな岩が据へてあつて、童話の婆が川で洗濯をした臺石だとある。婆の足跡らしいものが見えると説明してあり、川の中にあつたが、再々洪水で水中に没するからこゝに持つて來たと立札がしてある。神社の寶物……といふ程でもないが社務所の一室にくさ〳〵のものが並べてあつて、中に大昔棲んでゐた有角動物だとの説明つきで角があり、型の如く三本指の鬼の髑骨寫眞や、七百年を經るといふ屋根瓦これはその昔桃太郎神社が、此の山中にあつたその位置から堀り出されたものとあり、愈々到れり盡せりの感がある。境内には、本誌四月號で石曾根民郎君が書いてゐる。桃太郎主義の童話の小父さい巖谷小波の句碑などもある。まことに

微笑しい處である。

神社は子供の守神として祀られてあるといふんだから、親類の子供達へお守を受けたりして下向した。

そこで私はこういふ微笑しい傳説の地ですまない事だが、桃太郎の童話と桃の事を考へて、苦笑したのである。民郎君の樣に童話の研究者でないから桃太郎の昔噺が何時の時代に出來たか、一向に知らないが、私の考では此の話は、斷然支那の桃を貴ぶ思想から來たもので、噺そのものは日本で作つたのだらうと思ふ。神社に並べてある古瓦が、七百年を經るのが事實で、そこに桃太郎神社が祀つてあつたとすると、話はよほど古いもので、大名が出て來たりする花咲爺などよりは古いに違ひない

兎も角、桃から生れた桃太郎が鬼を退治るといふ事は、全く支那の古、桃を拂鬼の植物とした事に一致する。

支那の古典に避鬼の力を有する植物として擧げられたものに葦、桃、蒹葭、桑その他があるが、桃に到つては、至極目芽度いもので、武陵桃源、劉元天臺西王母の諸説話はいづれも目出度いもので、西王母の桃の實を食つた東方朔などは九千年も長生をしてゐる。桃が仙木として避鬼の樹木たる事を書いた幾多の支那古典を、要領よく簡單に説明したのは三才圖繪で、桃は乃ち西方の木、五行之精仙木なり、故によく邪氣を壓伏し百鬼を制す、今の人門の上に桃符をなひるはこれを以てなり、又地上釘して家宅を鎭むこれを桃橛といふ。許愼が曰く、鬱桃棺に死すと、棺は枝也、故に鬼桃を畏る。東南枝最佳なり」とある。

桃で鬼を退けた話は日本書紀にも古事記にも載つてゐる。

伊邪那岐命が、その妻伊邪那美命の死體の醜を見たところから、怒りを買ひ、豫母津志許賣に追はれ、黄泉比良坂まで逃げ進退谷まつて坂本の桃の果三個を取つて投げつけたところ悉く退散せしめ得た。それで命は桃の木を稱揚して意富加牟豆美命の名を賜つたといふのである。

元來桃の樹は支那渡來の植物だとの説があるが、古事記あたりに桃の果が載つてゐるのを思ふと、渡來説を信用すべきならよほど古い渡來である。

とまれ桃がそんな風に支那で鬼を拂ふ樹だつた所から、日本の桃太郎さんが生れた事は間違ひなからう。その桃太郎さんが、犬山から測る十八丁の彼方で誕生したのは何時の時代だか知らぬが、誠に目出度い事だ。

まだ桃は流れて來ぬに子は寢入り　古句

阪大川柳會編纂●路郎序

川柳句集

不朽洞

頒價壹圓
送費六錢
（四六判二〇〇頁）

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である
本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。殘本僅少至急申込あれ！

大阪市西成區玉出本通三ノ三六
發行所　不朽洞
振貯大阪三〇三九二

川・協の頁

川・協の仕事にエスカレーターのやうに撓みなく前進を續けて居るので御安心の上　氣長がに御支援願ひたい。大分基礎工事がすすんで來たのも柳界の將來を深憂されてゐる諸君の御後援の賜だと感激してゐる。　川柳人協會

★次回の交驩大會は金澤で

五月十六日の第二回裏日本大會は四十五名の出席があり、頗ぶる盛大に開催された。席上、來年金澤に全國川柳家交驩大會開催の件を附議されたので、縣下各吟社代表八名別室に退き鳩首協議、新に石川縣川柳聯盟の結成を約し、之れが肝煎となり來春いよ〳〵金澤に於て交驩大會を開催することゝし、前回開催地名古屋から出席してゐた大窪文芳君にまで報告をした。

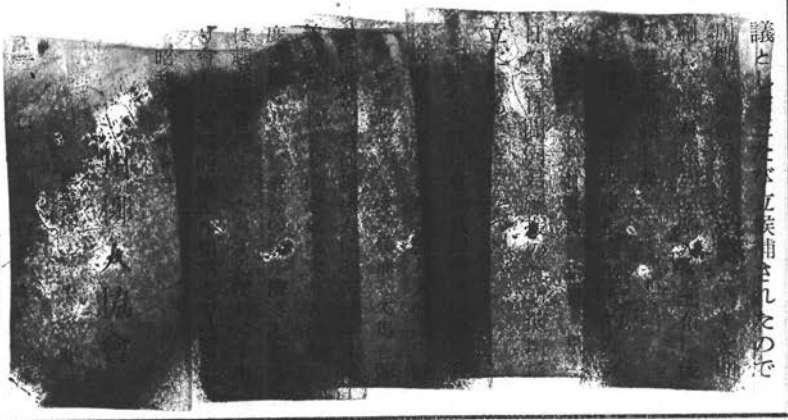
仄聞するところによれば、聯盟と云つても實際力を入れるのは金澤の加納川柳社と鶴來の銀紙川柳社位のもので目下の情勢から實際結盟出來るのは縣下の六社ぐらいであらうと目測されてゐる。大會プランは未定であるが、句會を金澤で懇親會を山中温泉で開くことになるだらうと云はれてゐる。

★「川・雜」例會費値下斷行

柳界への貢献と改革に向つて邁進しつゝある川柳雜誌社では來る六月六日の例會から會費三〇錢を二〇錢に値下げし、川柳人協會員章提示の方へは從來二〇錢のところを一五錢に奉仕的値下げを行ふ事となつた。

★川柳人の市議立候補

▼川柳人萬よし庄健一君が大阪市議と[illegible]立候補されるので



れし）又は

川♣協♣の♣頁

三一五一四御利用の方は別便で其の旨お知らせ願ひます

★川柳講座近く刊行

前田雀郎君が、力を入れてゐる「川柳講座」もボチ〳〵目鼻がついて來た。內容概目を一寸のぞくと無くもがなのものもあるが、穩健な雀郎君としては止むを得ないのであらう。兎にも角にも柳界はじまつて以來の大事業である。是非共完成させたい。各位の應援を切望する。

各位の應援を切望する。會費一ヶ月（講座一卷・雜誌せんりう一部）金一圓、三ヶ月分（講座三卷・雜誌三部）二圓八十錢、六ヶ月分（講座全六卷・雜誌六部）五圓五十錢發行所東京市京橋區銀座西五ノ三（ヒッジ屋階上）川柳講座刊行會

★各地の吟社へお願ひ

川●雜の例會では川●協會員章の提示によつて會費の割引を行つてゐるが、全國各地の各句會でも川●協會員には特に會費の割引をお願ひする。割引實行を應諾された吟社は御一報を乞ふ。本欄に紹介して會員の出席を促す事とする。

★寫眞を募る

遠隔の地にあつて、親しみを早めるために會員の寫眞を掲げたいので近影の惠送を乞ふ。

★會員に告ぐ

遠近各地の會員で來阪された時には是非共寸閑を割いて本會を訪問されたい。協會に對する認識を深めるためにも特にお勸めする。

×

名譽會員安川久流美君（金澤）は久留美と改號された。

川柳人協會へお這入り下さい柳界の改革は川柳人の手で致しませう

申込所　大阪市西成區玉出本通三の三六　川柳人協會

天然鰻の味

日本料理の粋

竹葉亭

本亭　大阪市瓦町（大手橋西詰）

南店　同湊町驛前（阪急ビル）御座敷と食堂

北店　同堂島濱通（渡邊橋北詰）御座敷と食堂

梅田阪急百貨店　七階和食堂

戎橋三笠屋　二階和食堂

柳川物名所名本日

（京　の　都　卷）

選　明　紫　川　山
畫　鱗　大　賀　朝

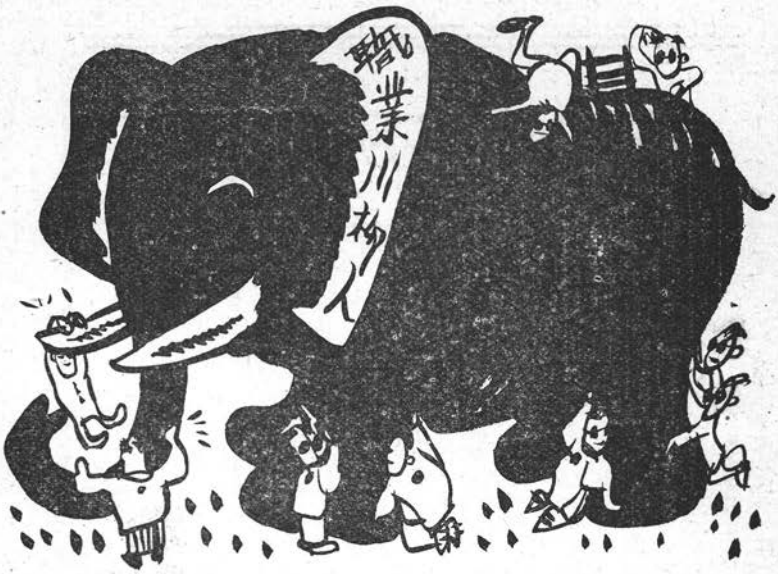
（一　十）

八　つ　橋

又おいでやす八つ橋を燒くかまど　好涙
八つ橋の灯に京の夜は時雨する　不二男
加茂川の京に八つ橋反りかへり　秋生
トランクに詰める八つ橋母が待ち　月鈴
京土産聖護院の箱の文字　いの助
八つ橋をぽきんと嚙んだ三等車　木履
八つ橋の土産で急な旅へ立ち　水客
陳列の八つ橋へ立つ國訛　柳狂
八つ橋が京から着いた青葉風　佐保蘭

◎

京都へは降りず八つ橋一つ買ひ　紫香



喫茶店のAとB

―職業川柳人問題―

（一）

「まあ寛いで、一問一答式に談さうではないか。」

「そうですね。その方が判りがよくて結構です。では貴方はどうしてあんなことを發表されたのです。職業川柳人宣言なんて」

「その問題を説明するには、人間の欲望の科學的解説、社會機構、それから、職業及職業川柳人のディフィニションから説き起す必要があるが、それは後廻しにして、平凡に判り易く答へやう。大体今の川柳家、嚴密に云へば川柳愛好者がグン〳〵殖ゑる割に、その仕事をしてゐる人たちがみんな内職式では、大きく云へば斯界の發展を遲々たらしめやうぢやないか。だから從來の仕事を棄てゝ、川柳の仕事に專念することの意思表示をした譯さ。詰まり水府君が、今まで、あちこちの店へ雇はれて廣告の仕事に携つてゐたのが獨立して、自分で廣告業を開始するのにヒラを配つたやうなものさ。

「岸本さん、こんな場合に、どうしたらいゝでせうと聞かれた時、無報酬で原稿の作製をしてゐたんでは職業にならないぢやないか。勿論營業開始のヒラを配らなくても、そんな世話をしてゐればお禮を呉れはするだらうが、呉れたり呉れなんだり、たとへ呉れても最少限度に支拂はれたりしたんでは自己の生活を營む上に支障を來たす譯ではないか。氣の弱い人間は頼みたくても頼みに來ないかも知れな

い。それでは商賣にならない。そこでどうを撒き、プライスリストを掲示すれば賴みたい人は氣易く賴めて、その人も助かるし、水府君もお陰を蒙る譯ではないか。」

「しかし水府氏の廣告の商賣とあなたの川柳の場合とでは意味が違ひはしませんか、水府氏のは明らかに商賣だし、あなたのは趣味的方面だし。」

「そんなことを云つてるから駄目だよ。川柳を趣味として投つてゐるのは君等だし、君等に限らず廣い意味のその趣味家を相手にして仕事をせうと云うのが僕の宣言だ。云はば開店披露のビラだ。だから水府君の廣告の仕事、僕の川柳の仕事も職業としては一緒だよ。ただ向うはお客樣本位のものを作製しなければ賣れないし、こちらはこちら本位のもの、即ち藝術的なものを作製して賣らうと云うのだから虫がよすぎると云へば、良すぎるがそこに僕の職業に對する苦心と興味と生甲斐がある譯さ。仕事は揮毫だけではないよ。諸君に代つて柳界のために働くのが主眼だよ。」

「川柳職業人なんて川柳を冒瀆するものだと云つてゐますが」

「若い人たちは川柳を職業にすると云うと早合點をして直ぐに川柳の冒瀆だと云うが、川柳を一句五圓だ十圓だと云つて賣つて賣れると思つてゐるのからしておかしいぢやないか。小說の一篇と川柳の一句とは社會の需要が違ふ。全然賣れもせんものを、賣らうと考えるほど僕は腦留守でもないし、又自惚も持つてゐないよ。川柳の冒瀆と云うのは水府君がやつてゐるやうにノーシンだとか。何んだとかを川柳にする名品川柳とか云う奴さ。その實、駄作川柳を澤山作らせて天下の大新聞紙上で水府先生選と云う式で發表してゐるのが、アレも川柳の冒瀆なんだ。なんだ川柳々々と云つて騷いでゐるが、川柳なんて云うのはあんな苦駄らぬものかと社會では誤解するだらう、しかし僕は水府君のやつてゐることを攻擊してるのではないから誤解してはいかんよ。それより川柳神聖派と云うてよいのか、川柳淸敎徒と云うてよいのか知らぬが、そんな冒瀆云々を叫ぶ連中はあれをどう考えてゐるんだ。一向攻擊してるやうにも聞かんが、ひそかに投句して懸賞にでもありついてるのではないかね。この問題などは明らかに川柳の冒瀆だよ。しかし、所謂廣告主が自己の商品を賣るために川柳を利用したのは成功だと云へぬこともないだらう。あれは全く水府君を利用した譯だ。水府君も自分の廣告業の立場から云へば利用されるのも一手段だらうし寧ろ廣告人岸本としては自ら持ちかけたものと見ていゝだらう。さあ、そこだよ。水府君は自己の職業のためには惜しみなく川柳を賣つた譯だ。これは廣告人岸本龍郎と水府の混同だよ。水府はこの點、ガール川柳人を賣つた譯だ。これが冒瀆でなくてなんだ。こんなこんなことを云うと僕と水府君と個人的になんかあるんぢやないかと疑う人があるかも知れぬが、一番いゝ例があつたからしやべつたまでだ水府君には氣の毒だが、一寸調子に乘りすぎたきらひがあるれまあ身から出た錆だから頂門の一針として聞いて置くさ。これからしすんだ事は仕方がないさ。これから注意する事だな。」

「まるで僕が叱られてゐるやうですね。」

「そうさ。君もあんまりハツキリしてゐそうにないから意見のそば杖を食つた譯だ。」

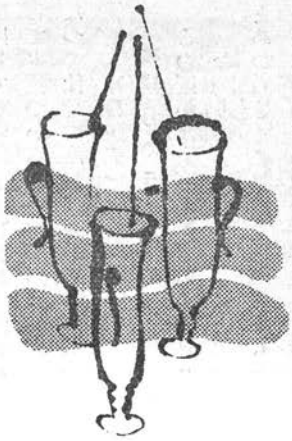
「もう少しお手輕に願ひたいですね。」

「アハヽヽ一寸手嚴しいかねこんな事では僕も商賣にならんね。僕も氣をつけるよ。」(續く)

『近作柳樽』欄の作家に告ぐ

従來「近作柳樽」欄の投句數が僅に十句であつたため、熱心な作家の投句力を委縮させる惧れがないでもなかつたが多忙な主幹として到底それ以上の選句時間を持たず甚だ遺憾ながら十句を限度とされた譯であるが昨夏來專心川柳のために從事され內外の柳務も整備しつゝあるので此の際作家諸君の要望を容れ、從來の二倍卽ち**二十句以內**とすることに改めたから諒承ありたい。

（編輯局）



感激が生む句

川柳指導講座「ラヂオ」

塚越正光

聽取者三百萬を超えたラヂオ、ベルリンのオリムピックを中繼するラヂオ、ロンドンから戴冠式の實況を傳へて呉れるラヂオ、こんなことを數へ立てて居たら何時まで經つてもきりがないからいい加減にして置くが、兎に角ラヂオは私達の生活から一日だつて切離せないのだから、科學の驚異だの文化の尺度だのと言ふのは一昔前のことで、完全に生活必需品の一つである。假へば自分のとこに無くても隣りの家で鳴らして呉れるし街を歩けば厭でも應でも私達の耳の中へ飛込んで來るのだから、この位身近なものは無いとも言へる筈である。そこで諸君の先輩はどんな風に川柳化してゐるかと本誌五月號を試みに披いて見ると、諸君驚いてはいけない、川柳塔、近作柳樽を初め一路集、日本名所名物川柳各地柳壇等を見渡してもラヂオといふ文字は發見出來ないし、ラヂオを題材にした句も一句もないのである。これは何故だらう、諸君は何う思ふか知らないが、私はこれをラヂオに感激を覺えなくなつたからだと思ふ。尤も課題吟などでは課題にもよるが、この五月號へ載る句を作つた時分に感激に滿ちた放送が無かつたのではなからうかとも思へる。

四月上旬の「神風」ロンドン着以來リーグ戰、觀兵式、競馬、角力と中繼放送に食傷し相な現在なら、ラヂオの川柳が氾濫するに相違ない。その點では本欄の諸君はこの課題について先輩達の解答と自らの解答とを比較研究する便宜がおのづから與へられるといふ思はざるチャンスに惠ま

れることになるかも知れない。

密談にラヂオ小さくかけて置き

ガンガン鳴つて居るラヂオでは肝腎の密談がお互ひに聽きとり難いし、さりとてスヰッチを切つちまへば工合が悪いし、そこでラヂオを小さくといふことになるが、この發見は本欄の作家としては手柄である（句主大阪市　煙雪君）

面一の知識ラヂオに凝つて居る

恥かしいことだが私は面一といふ言葉が何ういふことなのだか知らない。何誰かの御教示を仰ぎたい。茲でゆくりなくも昨年十一月號發表の「貯金」で「其當時五錢二厘で貯金もし」について五錢二厘が私に判らないと記して置いたがそれから間もなく、それが兵卒の給料であることを御教示下さつた方があつたのをその儘にして置いたことを思ひ出してこの稿を書き初めてからその手紙を探したがどうしても見つからないので御親切な方への御禮が妙な形式になつて仕舞つたが、茲から改めて御禮を申上げる。（句主朝鮮　東狂子君）

お隣りのラヂオに子供踊つてい

この朗かな家庭風景も何か物足りなさがある。いつそお隣りのラヂオにうちの子も踊り

とあからさまに叙して見たらとも思ふが、私にもこれでいいとは言ひきれない（句主　大阪市　牛歩君）

倦怠期ラヂオも啞にされてゐる

すべてに感興の湧かない倦怠期だとすればこんなこともあらうかと思はれる。これをもう一歩つつこんで

倦怠期ラヂオも啞にされたまゝ

としたらその時間的經過までが感じられると思ふがどんなものだらう（句主　大阪市　龍城君）

太閤記老人ばかり聞いてゐる

ただ聞いてゐるだけでラヂオをはつきりさせるには、テーマにも表現にももつと特異なものを必要とする。その點からすれば

太閤記老人ばかり聽くラヂオ

とした方が平凡ながら場面は描ける（句主　島根縣　木馬君）

株もつて經濟市況わかるなり

前の句と同樣にわかるなりではラヂオとは言へない。經濟市況といふ放送種目があるが新聞の紙面にも經濟市況といふ欄があるだけにそして株を所有すれば經濟市況に關心を持つのは餘りに當然でもあるので、これを逆に

退屈のあまり經濟市況聽く

といふ場面を想像することも、現實から逃避する一手法であらう（句主　名古屋市　三申君）

歌謠曲雜音入りて尙囃し

歌謠曲が放送用語であることは斷るまでもないが、中七

以下が私に解し難いものとなるので困るが恐らくは雑音が入つても囃してゐるといふのだとすれば

歌謡曲　雑音などに拘はらず

だが雑音が囃子のやうに聽えるといふのだと自からこれでは違ふことになる（句主　大阪府　錦溪君）

ラヂオ屋の前立つフアンとはなりぬ

野球フアンか浪曲フアンか或は角力フアンか、いづれにしても前立つはぎごちないといふよりもかたことである。

ラヂオ屋の前素通りの出來ぬ頃

としてフアン心裡へ焦點を合せて見たらかたことからも救はれる（句主　岡山　美靜流君）

いいニュースラヂオ軒並聞こえて來

いいニュースが生きてゐるのが佳い、先輩の句に「あの店のラヂオの續き茲で聽き」といふのがあることを思ひ出した「句主　大阪市　よしを君」

つぎ〳〵とラヂオ聞ゆる街をゆき

よしを君と同巧異曲だが、彼はいいニュースで生き、これはつぎ〳〵とで生かしてゐる（句主　山口縣　宙芥君）

〝打ちました!!〟の聲に素通り出來ぬ樣

美靜流君の句からもう一歩出てゐる點が買へるが〝打ちました!〟とひつかけや耳だれを附すことはひとりよがりと言はなければならない。斯ういふのやルビつき川柳を活字に頼る句と私は名づけてゐる。活字を弄ばずともよい句であることこそ望ましい

引止める樣にラヂオは打ちました

でも句主の言はうとしてゐることになる（句主　大阪市　萬明君）

聞きにくい電話にラヂオとめさせる

よく見受ける情景である。殊に借電話の場合など斯うした心づかひをして呉れると聽いてゐた人達に申譯のないやうな氣がする（句主　兵庫縣　普天君）

ラヂオ引く身分へ寄附を强請られる

さつき私はラヂオは生活必需品だと言つたが、この句で見ると贅澤品視して居る地方があることに氣づく、贅澤品視してゐる證據はラヂオ引くの引くで證明出來る。だからさういふ地方では寄附を强請されるやうなこともあらうと同情しやる（句主　長野　幹君）

クライマツクスに母は子供を手で制し

このクライマツクスがどんな場合かどんな放送種目なのか判らないのも不可ない。それにこれだけではラヂオとは言へない。

ラヂオドラマに家中が泣かされる

とすればクライマツクスも母も子供も句の蔭になるが場面は描ける（句主　高松　廉夫君）

ラヂオでは間にほんの鳥も啼き

これは朝の小鳥の啼き聲とか夜の佛法僧の啼聲を詠んだ

感激が生む句

感激が生む句

のでもあらうが、これではあまりにそのまゝ過ぎる。

小鳥から春のラヂオの朝となり

とでもすれば一シーンをキャッチしたそのことだけで句になる（句主　高松市　柳夢君）

留守居してラヂオはかけつぱなしなり

一昔前なら「あるだけの本に倦きてる留守居番」といふところだが、流石にラヂオ萬能時代留守居はラヂオによつてその退屈を凌いでゐる。字句を整えるとして

留守居さ　せられてラヂオに　倦きてゐる

だがこれは私の好みが過ぎたかも知れない（句主　愛媛縣椋影君）

九時を打つ時計がうるさいいいラヂオ

夜の演藝放送の時間中に一番多く時計が鳴るのは九時よりない、そこへ目標を置いたこの作家はいい所を狙つたと言へる。そこで私もそれを尊重して

九時を打つ時計を睨む　いいラヂオ

とうるさいのを動作に表はして見たがうなづいて貰へるかしら（句主　大阪　銀濤君）

社宅皆ラヂオをかけて無事に暮れ

この暮れ夕方を意味するものでなく今日一日を無事に暮らした意味であらうと思ふ。社宅風景として描けて居る。（句主　愛媛　孝輔君）

内閣のすつたもんだを寝間で聞き

これがすつたもんだでないもつと眞劍に聞かなければならないものなら寝間で聽くやうなこともあるまい、そこにすつたもんだが生きてゐる。これを對蹠的な句に「宮様もお聽きと母のつつましい」といふ夢一佛の句がある（句主　大阪市　隼人君）

父と子の意見ラヂオへ對立す

家庭に於ける新舊思想の對立を句にするなら對立といふ言葉を使はないでそれと思はせる方が巧者である。この場合も

父と子の聽き度いラヂオけふも紛め

といふやうに表規すると生硬さから救はれるが張切つた調子とは言へない（句主　今治市　文庫君）

私は今までに「ラヂオ」の選を何回かしてゐるし「ラヂオ」の川柳を澤山詠んでゐる。最近では五月號の「川柳きやり」へ發表した左の一句だが、諸君の參考になれば幸である。

神風のニュースへふつと目が熱し

▼校正してゐたら講師塚越氏が「面一の知識」が判らぬとのことであるが、朝鮮の面は村の事であるから、内地で云へば村一番の物識りと云ふ意である。それで句意が判るでせう。（路郎）

武玉川三編研究（六）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(94)　**閑出して無理に買せる惚くすり**

省二＝彼氏の戀愛事情を他から聞いて、そんな手ぬるい事では駄目だと焚付け、無理に惚藥を買はせる。斯る友達も仲々あるものだ。（「買つてきて不審のはれぬ惚藥」武十六）。

秋の屋＝油斷のならぬ惡友で、後には三原山へ誘引するかも知れぬ。

東魚＝戀に惱んでゐる當人から、其友が次第を白狀させるのだらう。可笑味がある。

(95)　**基佐を取殘す大原**

秋の屋＝基佐は、露の字を質に入れたといふ、傳說で著名の櫻井基佐（號宗仙）で、大原の露をみて、これは基佐が取殘したものであらう、と云ふのである。

東魚＝俳諧辭典には、「中務丞と稱し、後永仙と改む宗祇の名を猜み辱を與へんとして、却て其伎に服し、終に門人となり嵯峨三吟をなす」とある。門人となりであるから宗仙の方が正しいのであらう。尙、再考したい。

省二＝「質に置く露はむかしの風雅なり」（年籠）。一に元佐通稱彌三郎、櫻井基佐集二卷を著す。私の手元の本は悉く永仙とある。連歌の花の下より露の字を黃金三十枚に置かれける。

秋の屋＝宗仙は記憶の誤り、調査せるに永仙の方が正しい。

(96)　**百度參の跡を掃出す**

省　二＝お百度詣りが、皆歸つてしまつた。寺の門限でもあり、その跡を掃出して置く。

秋の屋＝百度參は、錢緡を數取りに使用したから、其の跡には藁屑が散つて居たらう。

東　魚＝「掃出す」は堂内のやうな感じがされるのが、ちと變に思はれるが、淺草寺のやうに、堂の周圍を廻つて、お百度を踏むだらしいから、「掃出す」もよいかも知れぬ。

省　二＝境内の狹隘な寺では、お百度石といふものを建て、そこから本堂前までを、ふむだものである。掃出すは掃除するのである。

(97)　郭公思ひ〳〵に漕出させ

秋の屋＝隅田川などの初夏の情景らしい。佳句であると思ふ。

東　魚＝家根船と出掛けるのもあり、猪牙で一散に山谷堀を目ざすもありといふので、「思ひ〳〵に」であらう。清爽な氣分は受取れる。

省　二＝くせのない句だ。

(98)　初午の裏はかけ菜に氣が腐り

省　二＝かけ菜とはほし菜の事で、蕪菁の葉蕗を軒に下げて、陰乾にする。――初午の裏とは。

秋の屋＝農家の初午祭で、稻荷の小祠の表の方には、幟を立て提灯などを掲げて、其賑はしくみゆるけれども、祠の後(裏)に廻つてみると、からびた干菜が掛けてあつて、氣が腐るといふのであらう。

東　魚＝明解。

省　二＝私もその樣に想像はしてゐた。田舍寺の初午かと思つたのは、(161)「寺にさへふせう〳〵な午まつり」があり、「初午の太鼓は寺の稻荷にも」(眉七)とか、色々の參考句からであつた。世の中は裏と表が違ふものである丈け、複雜で面白い。

(99)　娘か逃て追人なくなる

秋の屋＝男女が手を携へて出奔したのを、追人がその男は捕へたけれども、女(娘)は遠く逃去つたので、最早それを追ふ必要が無いと、追人が手を引くのであらう。

東　魚＝骨を折つた處で、お目當てがなければ、駄目だと云ふ心持ちなのであらう。

省　二＝追人がつかなくなる、あきらめる處に、或は多少の心當りがあるのかも知れぬ。

(100)　過去帳に惜しい男をとめてける

省　二＝死なしともない、惜しい男であつたのだ。(過去帳は俗名、法名、死亡年月日等を記す)。

秋の屋＝前句に據つたのであらうが、男でも女でもよい

と思ふ。

東　魚＝男一疋と云はれるやうな、人物を思はせられる男女何でも宜いやうだが、どうも男の方が味があると思ふ

(101)　**落馬を恥に立ぬ意地張**

省　二＝「落馬の告の其馬でくる」（金・上）となると、落馬も面目ないが、でも、荒馬だなどと意地張強く恥とはせぬ。—「かるひ落馬を取卷てのむ」（金・上）位なら、笑ひ話とならう。

東　魚＝我落ちにきと人に語るな、なんて云ふ負惜しみの歌でも、詠む仲間だらう。

秋の屋＝頑強の田舍武士らしく思はれる。

(102)　**追人の腰の拔るはし詰**

省　二＝追人が橋の袂まで來てみると、南無三、入水してゐたので、腰をぬかして驚く。

東　魚＝贊。云ひ方が巧みである丈け、チト芝居氣が目立つ。

秋の屋＝橋詰と云つて投身を云はぬのは、如何にも巧妙で、心憎い作者である。

(103)　**六ツと六ツとか鐘のおもいれ**

省　二＝今日の午前午後の六時。鳴る鐘により聽く人は様々に思入る事である。例へば「明と暮鐘は曲輪の會者定離」だ。「鐘のおもいれ」がよい。

東　魚＝味に鐘もひゞくと云ふ心持。

秋の屋＝諸行無常とも鳴り、寂滅爲樂とも響く。

(104)　**蚊はしらの顔へ崩れる半太夫**

省　二＝元祿頃、江戸半太夫の語出した半太夫節は、通人間に流行した。「半太夫天命を知る人許り」の如く御老人連が得意になつて、うなつてゐたものらしい。語つて居るうちに蚊柱が崩れて、顏を襲撃してくるなどは、隨分熱度の上つて居る樣が面白い。その位は毎度の體驗なのではあらうが。

東　魚＝軒下の竹床几などで、涼をとつてゐる場合であらう。

秋の屋＝如何にも熱心に語つてゐる、其場の光景が想像される。

(105)　**とし忘夫婦て仕廻ふ八重むくら**

省　二＝年忘の馳走を、夫婦して仕舞ふなどは、いかにも八重葎の簡素な、生活振りを思はせる。

東　魚＝わびしい乍らも、平和な境地である。

秋の屋＝浮世を捨果てた夫婦でもない、人目を忍ぶ、片田舍の佗住居であらう。

(106)　**牛盜人の棒で仕かける**

省　二＝「仕かける」は、やり始めるの謂。牛盗人が棒をもつて、工夫しつゝ着手する。

東　魚＝見つかつて、棒で立ち向ふのではないか。牛でも盗まうと云ふ奴だから、無鐵砲な力強い奴が想像される

秋の屋＝「牛盗人の」、のの字が有るから、棒で仕掛るは盗人らしく聞えるが、やはり盗まれた者が、棒を持つて追駈るのであらう。

(107)　**淺草に舅か出來て歩行かね**

東　魚＝嫁の里が淺草なので、これからはうつかり、淺草をぬけて北の方へは行けぬ。と云ふ一寸おかしみをみせた句かと思ふ。

秋の屋＝前說の如くであらうが、「歩行かね」は少し可笑しい。「行きかねる」とすべきだと思ふ。

省　二＝その方が普通で判りよい。—四ツ手で顏をかくして乘込むか。

(108)　**鍔の鳴る刀の賣れる八王寺**

東　魚＝絹商人などの道中ざしに、相當、切れる刀が賣れるといふやうな事か、どうも難句である。

秋の屋＝八王寺より絹織物を產出するのは、近世の事であると私は憶ふが如何であらう。昔はこの地に八王寺同心と稱する者が、多く住居してゐたから、夫等の人の買ふ刀ではなからう歟。鍔の鳴るのは安價の刀で、これをがたくり丸といふ。

省　二＝？印にして置いた句である。「八王寺」關係のものは、炭燒か、三太郎の句か、王子千人組かの三種より憶出さぬ。同心百人を一組としたのが、十組もあつたのだから賣れもする。か說正當ならむ。——秩父絹は江戸時代から製織されてゐた。八王子に就ては知らぬが、佐藤信淵の經濟要錄には、八王寺木綿は記されてある。織物の土地ではあつたであらう。

(109)　**命あるものを殘して汐干かた**

東　魚＝汐がひき去つた後に、哀れや、ひらめや小魚など、汐に遲れて生ながら、干潟に置き去りになつた、と云ふのであると思ふ。

秋の屋＝前解適切。

省　二＝殘された小魚などを、拾ふ娛しみもある。

前號（武玉川）正誤表（蛭子生）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
二六	下	一二	瓦かな	瓦かま
二八	上	七	人れ	入れ
同	下	二	合鑑	合鎰
二九	上	二一	秋李	秋季
同	下	二	世も未	世も末
同	同	九	思はれる	思はれない
同	同	二〇	武十三	武十二
同	同	二三	さア○し	さアさし

漫画センヨン

六月マンガ

大阪漫畫トリオ

小川武男
甲貝スミ
北幹夫

↑(一)初夏のホール

婦人『アラ、メンナ事なさるとパンドマンに見つかりますよ』

不良外人『カマヒマセン！』

婦人『アラ、あれ、あたしのハズなのよ』

↑(二)買ひカブつたよ

『これがボーナスだとおつしやるんですか？』

『ウーン、今年は騰貴(投機)時代だから株券代用だつて……サ』

(スミ男)

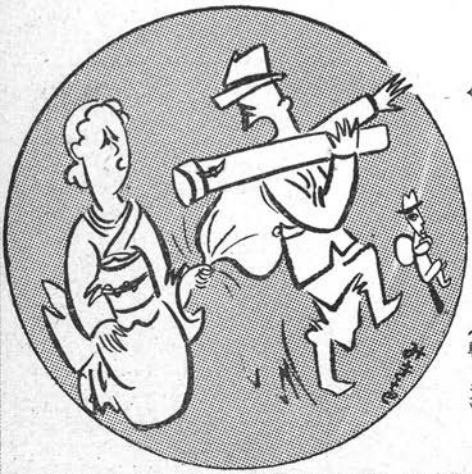
(三)ついつられるデス

『あんた又あの友達につられて鮎釣りにいくの』

『なにしろあいつは友釣の名人でなア……』

(幹夫)

←



青空の下の句會

濁つた水の中で泳いでゐる錦魚を可哀想だと思ふ人々は街の生活から解放された青空の下の一日を持つことをおすゝめしたい。青空の下の句會はこんな意味から生れたので、あまり澤山の人々を集めて、幹事が汗だくになる會ではない。幹事もノンビリしたい會なので、特に案内も出さないことになつてゐる。

その第一回を五月九日に開いた。兎に角京阪の天滿橋に、路郎、新水、綠雨夫妻、八歩、丹路、南濃路の諸君が集まつた。集つた頭數だけ壽司の折詰を買ひ來んで京阪に乘る。森小路で下車した。この沿線は常任世話役の新水君の縄張りだけに、「こゝが森小路銀座だす」と尖端に立つて説明をする。「なるほどなあ」「よう開けたもんやなあ」「大阪にこんなとこがあるとは思はなんだ」と口々に勝手なことをしやべりながら、ゾロ〳〵とついて歩く。市會議員の視察そつくりである。こゝを曲ると斯う、あそこが何と、新水君の一人舞臺、と〳〵公設市場へ連れこまれた。案山子の店でハムを仕入れ、それから、又ぞろ〳〵歩いて途中で菊正を買ひ込んだ。その酒屋でコップを頭數だけ借りた。

目的地の城北公園についた一行は先づ植物園をのぞく。「これなんや」「これ夢やがな」「夢みゝ御存じのない若樣もゐらつしやるからうれしい。「これなんだす」とベラボーに大きな蔥坊主に驚いてゐる美奈子さん。「蔥や」と綠雨君簡單に答へる。「オヤ美奈子さんは何處で生れたんです」と横槍を入れる。「艸樂君が來たら、コレは何科の植物でとなか〳〵うるさいで」「專門やでな」「これはみな見本やで、生氣がないな」で鬼。それより早く辯當にしたいので、いゝ場所の物色をはじめ、池の端を通つて淀川堤にあがる。堤の下に、むしろを借りて敷く。ヤレ、〳〵でみんな腰を下ろした。

空は青空、陽はてか〳〵。こゝろよい微風に淀川沿岸の晩春を滿喫。

「コレ古い寫眞機だんれ」と云ひながら、新水君が撮してくれたのか、こゝに掲げたもの。(D)

川・柳・横・町

朝日機「神風」が歐亞飛行に成功したことは近ごろの日本人の血を湧かした最大なものであつた。それにしても擧國一致的な仕事に、紙面を割くに吝さかであつた「大毎」の態度には好感を持たぬ人が多い。そのために紙數の激減を見たさへ噂されてゐる。競爭は競爭、應援は應援、公器としての報導は報導、徒らに社の競爭心から報導を無視すれば讀者も默してはゐないだらう。同時に社の主催であるからと云つて毎日〳〵全紙面を塗りつぶすことも、もつての外である。讀者本位の編輯こそ最後のものではあるまいか。大朝の昂奮のさめない今日この言をなすのは冷酷のそしりをまぬがれぬかは知らぬが、大臣級の人物を擁してゐるとざへ云はれてゐる大朝大毎としては大いに考えていゝ事だらう。

☆

久流美が久留美と改號した。流が留になつたので發音には變りはないが、長髮の男が不意に丸刈になつたほどの心境の變化。その註に曰く。「これまでのやうに餘り流れずに留ることが肝心に候さ」これは流轉生活への三くだり半だつた。

ルービヒサア

宮内省御用達　大日本麦酒株式會社

☆麻生路郎の原稿に麻生豊が挿畫を描くと麻生トヨさんて奥さんですかと聞かれる。祖大の萬よし候補の應援演説に出ると、麻生久の兄さんですかと聞かれる。同姓繋がる緣でせう。姓ばかしでなく、路郎の甥に豊（ユタカ）があり、姪に久江（ヒサエ）がある。祖父も久助父の通稱が久七だとはいよ〳〵もつて緣故が深い。

☆金澤では銀波樓を森の家が訪れ、うたのかみと三人で痛飲したと聞くが、久流美が甘黛へ轉向したので、落丁の氣味がある。

☆最近東上した艸樂、愛妻携帶とあつて句會の入口だけ覗いて歸へる。

☆『むさしの』のしんげんち子、青龍刀の住所を知つてゐ人は知らして欲しいと書く。滿洲の名士石原頑鐵だ。「支那雜談」の著者石敏當だ。汝鯰地上に出て少しは勉强をしたがよいぞ。

☆看傘の編輯が蓼魚の手に移つたそうだ。活字の大きさも知らぬ男だと番傘同人がそしつてゐた。活字の大きさを知つてゐると人に使はれるぞ。活字の大きさなどは忘れてゝまへ。

☆大阪商船では臺灣航路のために「高砂丸」を新造して海の旅に精鋭を加えた。五月七日招待されて船内を見物した路郎、船長に「お酌をしてもらひながら、船長の姓名宮野鼻二三について鼻の字は上につくのか、下につくのか、と質問を投げたところが、巨大の體軀の船長すかさず、「へエ、鼻は上についてゐます」に大笑ひ。これはミヤノハナと讀むんだぞうな。（不死鳥）

行路集

(6)

長野晴濱

嘯棄

經濟の理論も會せずかにかくに文學しゐし我れを嘯棄する
一人が二人前分はたらかば失業あまた出でくなるべし

困る

ありあまる生産力の大太刀を振ひなづさふこの世を憂ふる
出來すぎて困り出來ぬにまた困る物の不思議に目ざめたまはね

矛盾

生産の諸力と生産諸關係の矛盾はつひに解かれざらめや
この矛盾揚棄せさする手力を日の本びとに與へませ神

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄で、すぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催

▼本社五月の例會は六日の夕から誓得寺で開催された。個人的案内扶き第一回の句會で多少案じられたが熱のある柳人で立派に句會が成立した。コレでなくてはと意を強くした。

路郎主幹は「所謂大家の句に就いて」と云つた風な題目で近時所謂大家と稱せられる人々の句が、サツパリ低調であるから、本年度の句をボチ〳〵檢討して見たいと思つてゐる。交誼は交誼、研究は研究、すこぶる無遠慮にやる決心である。私自身も所謂大家の一人だとすれば一層句の精進に努力すると結んで新進川柳人の血を湧かされた。

▲本社主催の青空の下の句會は五月九日、折からの晴天に惠まれて愉快に一日を過した。詳細は三四頁參照。

▲國都吟社（新京）の六月例會は十二日國都吟社事務所に於て開催の筈。

▲本社松江支部では五月二日大西八歩君が圍んで支部同人句會が催された由幹事山川兒君からの通知。

▲川柳國發行所（大阪）の五月例會は十日夕大阪細菌研究所に於て開催された。

▲川柳みすか吟社（今治）の六月例會は五日伊豫電鐵樓上に於て開催される。尙五月十六日は三周年記念の會を伊豫電鐵今治支店階上で開かれ、同日今治明德圖書館階上で川柳文獻展覽會を催された。大阪から溪花坊白柳子、申仙、宇和島から五風松山から大樓、虻之麿の諸君が出席された由。

▲住友金屬鑛業所親友會（尼崎）の五月例會は八日夕、路郎師を迎へて開催された。

▲高輪倶樂部主催の故佐瀨劍珍坊君の追悼句會は五月九日夕京橋豐玉河岸の朝日倶樂部で開催された。出席者五十七名。

▲本社松江支部では五月十日山川兒君の宅に於て例會を催された。

▲第二回裏日本川柳大會は五月十六日午後一時より開催、名古屋の文芳君はじめ四十五名の出席あり盛大に終了その懇親宴席上からなつかしい人々のよせ書を頂いた。

▲小樽川柳社（小樽）主催の北海道大博覽會記念川柳大會は、七月十七日午後二時から、花園町の大關に於て開催される。兼題「北」「海」「道」「大」「博」「覽」「會」各題三句、出席者は五十錢、投句者は三十錢添へて六月十五日迄に小樽市綠町二ノ二五芳賀源吾君方宛に送られたい。

▲本社廣島支部（廣島）の五月例會は二十一日廣鐵倶樂部に於て開催、盛會裡に終了した由。

▲旭川川柳社（北海道）主催の川柳大會は七月十六日夕旗亭「鯉川」に於て川上三太郎君等を迎へて開催される由。

▲弘前川柳社主催の觀櫻川柳大會は五月四日に開催、小林不涙人君をはじめ多數柳人の寄書を

川柳塔

路郎選

一錢で親子三人拜むなり　大阪　橋本綠雨

誘はれた青葉に毛虫一つ踏み　同

セルを着て區劃整理の道を行く　同

男は醉ふものよ淋しからうとなからうと　大阪　山本丹路

やがてくる夏初戀の海の町　同

情婦てふ名にふさはしき髪結ふよ　同

表情を殺してYES・SIRと言ふ　同

いたわりの手の下にゐてふと不逞　同

通俗に徹し「キング」の日曜日　同

颯爽と金借りに行け空は青　同

頂いた。

▲川柳くろがね吟社（八幡）では六月號を以つて百號を發刊されるがその記念句會の準備をされてゐる由。尙六月例會は五日夕八幡市大藏三條一丁目角禾乃君の宅で開催される筈

▲川柳しなの吟社（信州）では信州ピツクリ新聞紙上で懸賞川柳募集「横顔」締切六月十二日松本市金山町同社宛

創刊と廢刊

▲滿洲國新京に一月十六日松尾小女郎君等によつて國都吟社の發會式が擧行、「長春」四月號が創刊された。

消息

▲植山九天君（廣島）は五月二日御家族連れで來阪、同日本社訪問、二時間程路郎師書齋で歡談、夕の汽車で歸廣された。

▲本社客員沖野岩三郎君（東京）は衆議院議員の應援演說で和歌山に赴かれ、その歸途五月二日

工場勤務（二句）

採光が不足だ機械も不機嫌だ　同

五月の陽工場も窓をあけませう　同

ニュース舘何のニュースかベルが鳴り　大阪　高橋かほる

くわの葉をやり晩酌の父を待ち　同

紫でした印刷がお手に觸れ　同

丹前に換へ景氣よく手を叩き　同

南天の青葉を右に手を洗ひ　同

やさ型もカールも芦屋婦人めく　大阪　麻生葭乃

しみ〴〵と心培ふ部屋もなし　同

ままごとに桑の實も摘む信濃路や　同

猫の子人の子ウヂヤ〳〵ラヂオやかましい　同

掌の水子々もいれましよか　大阪　水谷鮎美

唇かんで娘ごゝろのホッチキス　同

下駄札にたばこのあとの浪花節　同

病弱へくだもの籠と青疊　同

肥へてゐるうへ白粉をぬつて醉ひ　同

夜大阪パンシオン・ホテルで路郎師、高尾亮雄、山口艸平の三君と昨夏以來の歡談をされた。尙四日歸東さる。

▲鳥生枯佛君（廣島）は五月一日所用を兼ね岩國錦帶橋を見物された。

▲岡崎祥月君は神戸で就職中脚氣療養のため四月上旬郷里松江へ歸松された由。一日も早く全快を祈る。

▲福田山雨樓君（横濱）は四月下旬から五月上旬にかけて大磯へ四泊、國府津へ二泊の出張をされた。五月十九日は下田から大島に渡り三原山を見物して二十日夜東京芝浦に歸られたが山上は霧で展望不能だつた由。

▲蛭子省二君（朝鮮）は時節柄四月下旬から亦々持病惡化のため注射、今度は微熱が續き體中が痛むとのお便りに接した。御一日も早やく御快方を祈つてゐる。

▲西田艸樂君（大阪）は夫人帶

群青に描けば春らし詩人めく	同	
春の陽の流れ椿に蜂がゐる	同	
枇杷の葉が青く二人の窓にゆれ	同	
ベリカンが鳴いて夜櫻追ひ出され	後藤青兒	大阪
保險にもかゝらぬ身體落葉かく	同	
おこる事だけを知つてる電話口	同	
陽炎がゆらぎ入學許される	同	
門燈を止めて儉約した氣でゐ	同	
足の血が拔けて仕舞つた後塲の引け	同	
むかしむかし稼げば樂になりしとか	須崎豆秋	大阪
癈馬となつて營門を出る	同	
大阪がゴーッとうなるたのもしさ	同	
錫紙も拾ひ二號もおいてゐる	同	
貞操へ二度目の夫とは知られ	朝田新水	大阪府
白晝の白首ならべてスラム街	同	
本名の發表出來ぬ破目に落ち	同	
大學の豫科で役所のお茶をくみ	宮岡白峯	大阪府

同で五月八日東上、名古屋で下車、九日東京へ。山雨樓、啞三昧の兩君に會はれた由。十日は松本へ民郎君の案内で市内見物後淺間温泉で一泊、下呂温泉を經て歸阪された。

▲江戸みつる君(大阪)は五月十四日渡滿されるので、十日夜本社を訪問。

▲大阪三越川柳會で活躍されてゐた平野不凡君は久留米のデパート旭屋に五月一日から勤務される事となつた。

▲本社梅田支部の鮎美、斗風、朔風、遊歩、靜波、由布、冬扇、大嶽、文定の諸君は五月十三日武田尾温泉に遊ばれた由。

▲大連の大島濤明君(川・協名譽會員)から「五年振りて湯崗子温泉に參りましたポプラ並木は新綠に崩ゐて池には蛙が鳴いてゐます。滿洲で蛙をきくことは此處以外ではとても得難いのです。

湯崗子蛙一づに懷しい

争議圍ぬれてる肩を撫でてやり　同

お靜かに呑めとは奴等の親切か　同

社大黨葉卷くわへた姿なり　同

ハンカチの白さ別れも愉し路　松本　石曾根民郎

よこしまな纖をあづけし飾り靴　同

蝙蝠の窓うつ街へ成り下る　同

夜櫻の雨に情婦の眉となる　同

カールして日本一のお孃樣　大阪　西いわを

出迎への埠頭嬉しく姉妹　同

有意義に遊び世間に認められ　同

反對を唱へ地主の眼のくぼみ　同

鯉幟住宅街を吹揚げる　同

ボン引の眼に本心を見すかされ　大阪　大西八歩

御近所の眼を盛裝のまばゆう出　同

欺された過去も持つてる美しさ　同

電線の下の麥刈る新市街　同

言譯を考へてゐる終電車　同

朝の陽にポプラひら〳〵初夏に入る

の句を寄せられた。

▲本社マンガセクションでお馴染のオサカマンガトリオは大阪市西區土佐堀筑前橋電停前昭和ビル(電土佐堀三三三三)にスタヂオを新設。

▲戸倉普天君(兵庫)は南紀椿で靜養してゐられたが快方に向はれたので四月下旬鶴の莊に歸られた由。

▲關本一瓢君(金澤)は五月廿四日能登の和倉温泉に遊ばれ同行は柳人でありません爲面白い句想もなくザル碁ゐ打つ事位が關の山です。近日六葉句集御送付申上げますとのおたよりを頂く

▲庄萬よし君(庄健一)は六月一日に擧行される大阪市會議員總選擧に社大黨公認として南區から三度目の立候補をされた。當選を祈る。

▲新水、舟々、柳雨(大阪)の諸君は五月廿一日名古屋の汎太平洋博覽會に赴き、吉田水車君に會はれ、知多半島をドライヴ遊遊、師崎で一泊、鳥羽から伊勢を經て歸阪された。絶景が前に一升輕過ぎる(舟々)

百點になれぬ日本のかなづかひ　大阪府　妹尾變人

女房から叱られる役拜受して　同

學生の相手になつて車掌ひま　同

麥畑に雲雀が降りて淋しいな　同

お大師さんの歸りでバヌがやかましい　大阪　中西おさむ

救急車手近の醫者へうなつて來　同

家傳藥愛想もなく賣つてくれ　同

戀をした頃の背廣が身に合はず　同

娘みな降りて心齋橋の朝　大阪　加藤ライト

借衣裳せめてミルクが稼ぎたし　同

父四國八十八ヶ所巡拜

吹降りへもう宿取つて居られやう　同

納屋の隅いつか使へる物を積み　兵庫縣　長崎柳秀

銀行の擔保となつた雪の庭　同

現實は果取なし朝のサラリマン　同

才能を認められてて嫁き遲れ　同

慶弔

▲住田亂耽君（兵庫）の宅では五月三日午前八時三十分女兒出生有喜と名付けられた由、お喜び申上げる。

▲本社客員米村あん馬君（松江）の母堂シヅ刀自は五月一日逝去された謹んで哀悼の意を表する

▲佐瀨劍珍坊君は三月廿六日逝去された。お悔み申上げる。

▲大村新蟬君（東京）の嚴父は七十五歳を以つて五月一日御他界された由遙にお悔み申上げる。

改號

▲安川久流美君は久留美▲大島錦溪君は石艸

轉居

▲清水良祐君（大阪市天王寺區勝山通三ノ四九〈〉樋口ヒロム君（東京市麴町區內幸町一ノ六帝國海軍社編輯部〈〉▲視野發行所（神戸市須磨區村雨町七ノ三五石河方〈〉▲西端南天君（大阪市大正區鶴町三丁目一二一中部方〈〉▲平野不凡君（久留米市東櫛原町南中尾立石津留代方〈〉加波澤默六君（東京市荏原區中延町四三五〈〉▲矢野虻の麿君（松山市外道後樋又四國セネカ製劑社內〈〉

清酒
白鶴
ハクツル
發賣元
嘉納合名會社
大阪・東京・神戸・京城・仁川・大連・奉天

一路集

募集句

袂

榎田珍竹林選

獨唱は袂抱えて媚をする　靜波
羞しい袂きちんと重りて　觀月
祭の娘袂の長さ競べてる　舞蝶
羽子拾ふ袂は肩に掛けられる　銀濤
元ブラの袂へ燐寸溜るなり　葉留路
端下錢袂に入れて朧月　葉光
歳々に女袂をつめて行き　みどり葉
打つ眞似をするも袂の淡い戀　鮎美
袂とは手を隱すもの坐す女　古心
灯にふるり〳〵レヴユーの袂舞ひ　由布
訪日の記念に長い袂なり　ライト
忘れてた袂の銀貨衣更　流葉
表情へ袂を使ふ年齢となり　龍城
袂から出す二次會の煙草折れ　曉童
着替へたる袂に煙草忘れたり　普天
男勝りの袂は邪魔にされてゐる　木馬
踊り子の袂は生命ある如し　文庫
涙拭く袂と知つて十九なり　文太
×
袂から自動車を出るお嫁さん　鐘生
銀糸ある袂に晴の日近き　青子
彼と來た袂に春の風を入れ　岩石
袂から戀の散歩のチョコレート　朔風
吃の娘の袂を持つてさびしがり　鮎美
袂から心盡しの物を吳れ　親市
春風を袂に受けて女店員　林幹
兩方の袂から出すコップ酒　都之介

佳句

兩膝へ袂を乘せて妓の若し　紫香
會ふ時と別れる時の袂なる　靜流
バット買ふに一錢足らぬ袂くそ　鐘生
國婦にも袂あるにはあるのなり　六窓

川・柳・書・架（六六）

昭和十一年 川柳特選集

和田天民子編著

▼本句集の卷頭には阪井久良伎、和田天民子兩氏の近影を掲げてある。

▼本句集は「昭和十年川柳特選集」の後をうけて刊行されたもの、例によつて後半には著者の穩健な雜筆が掲げられてゐる。

▼昭和十二年四月十五日發行。四六版洋裝。句集一二二頁、雜俎三四頁、定價金壹圓、發行所東京市牛込區揚塲町八番地川柳倶樂部社

川柳三題集

西原柳雨著
再生外骨編

▼編者再生外骨氏のはしがきの中に、著者故柳雨が原稿に附した附箋記事が掲げられてゐる。その一節を拔く。「謠曲と川柳」は噂を聞くこと不可能なりしも「女一代記」は可なりに評判よろしかりし（味噌は恐入るけれども）ものに候二つ共福岡日々新聞に連載せしもの「川柳九州志」は九州日日新聞に候云々とある。

▼目次の細目は省略して要目のみ掲げ

着流しの袂へバット一つ買ひ　斗風
人
袂抱へて制服をなつかしむ　南濃路

食堂

食堂で妻の不足を吐いてゐる　木馬
食堂へ恐々入つた頃もあり　幹
日曜は食堂へ行く新世帯　斗風
食堂の時間はづれを二人ゐる　水客
女連れ食堂へ來て良くしやべり　曉童
百貨店やはり食欲勝つてゐる　舞蝶
食堂で不平同志のうまがあい　不夜城
食堂へ來て食慾が急に出る　みどり葉
食堂のきれいな花を聞いてゐる　涙二
食堂の隅の二人はまだ若い　紫香
食堂の待つ間メニューの誤字見付け　古心
あと承きに來た食堂は仕舞ふ　六窓
子の數へ隣りのジョッキ幅か取り　鐘生
食堂へ子は貧しさを知らずゐる　銀濤
食堂で殘りの酒を飲んでゐる　觀月
メニューなど見ずにコックと馴染たり　葉光
食堂で話題を拾ふ漫才屋　靜波
食堂をまだ喰ひ足らぬ顔で出る　帆加夫

地
プログラム出す袂とはつまらない　葉光
天
兩方の袂から子の好きなもの　涙二

永田里十九選

食堂へ懷工合考へる　ライト
食堂の主人はいつも外で飲み　流葉
折角に來た食堂の定休日　新水
空腹へ食堂のびら突きつける　文庫
食堂の隣りの部屋は汚い間　同
食堂へ來て繪葉書を二枚書き　都之介
今買ふた地圖食堂へ來てひろげ　同
食堂のガチヤ〳〵〳〵と畫がすみ　由布
食堂の隅がきれいな婦人席　同
弟子連れて來る食堂の書もよし　鮎美
出前する食堂の主人氣輕なり　同
さて何に仕樣メニューの裏表　文太
まとまつて食堂を出る女連れ　同

佳句

サイレンへ食堂だけのエレベーター　柳坊
ボーイ來てまだメニューへまごまつか　ライト
食堂で腹充分の欠伸をし　新水
食堂で信玄袋の置き所　美知夫
食堂で女中同じものに決め　同

れば前記の謠曲と川柳、川柳女一代、川柳九州志の三篇となる。

▼昭和七年五月二十五日發行、四六版和綴二六四頁、定價一圓五十錢、發行者東京市本郷區龍岡町十五番地宮武外骨、發行所東京市麴町區飯田町六丁目株式會社內外社

▼本書の內容は例によつて柳雨翁一流の柳狂混交の根氣仕事のもので、新聞に續載したものである。

川柳　漫畫行進曲

麻生路郎選句並編
對岳坊・しげを・鳥平・柴舟・清（畫）

▼本書の「序」の一節に本書は少しく川柳をかみしめる稽古をしてもらひたいために出したのである。云々

▼內容目次を列擧すれば、赤い灯青い灯、趣味と娯樂、衣食住篇、佛神妖魔芝居と映畫、職業と職名、世はさまざまの春秋、年中行事、戀愛三昧、子どもの世界、花卉艸木、鳥獸蟲魚、山紫水明、天象、夢二題、戀慕、悲話二題對照、涼しい顏、時代の產物、正月が產んだユーモア、春なれや、大けなる旅の空、夏祭二題、虎々漫談、涼々清談

▼昭和七年八月十五日發行、四六版洋裝三三八頁、定價一圓、發行所東京市神田區錦町三丁目一一、大阪市南區順慶町一丁目五三湯川弘文社

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

本社五月例會

五月六日　於　耆得寺

兼題　蚊　（路郎選）　素顔（丹路選）
席題　宗教（三巴選）　錦魚（かほる選）
滑台（開路選）　ピストル（變人選）　古本（青兒選）　犢（五選）

値切つてる男の足へ蚊がとまり　水染
あら大きい蚊と戀人の手が頬に　かづを
蚊柱のバックで露路の紙芝居　三猿子
金庫からフラ〳〵と蚊が一つ　豆秋
宮角力勝負があつて蚊をたたき　艸樂
きつちりと坐つた足へ蚊が廻り　開路
王手飛車掛けて團扇で蚊を拂ひ　同
蚊や蠅の多い苦情も家主さん　變人
五月から蚊の出る話汗を拭き　青兒
惡くんとも孫にさまつた蚊は打てず　同
蚊のいのち我片意地に生れつき　丹路
蚊がひとつ眠れぬ顔へくるさびし　同
蚊にかまれながら意見はまだつゞき　里十九
逢曳は蚊の襲來を恐れてず　同
一晩はかまれて蚊帳をつりはじめ　ライト
蚊くすべへ亭主も外へ追ひ出され　同
脚で息してゐる藪蚊まだ吸ふ氣　三巴
春の蚊は角將を受られたときに逃げ　同
蚊に起きて見れば時計が止まつて居　青兒
蚊柱の市立今宮宿泊所　豆秋
眞打の表情になる蚊を叩き　かほる
あらそへぬ皺を素顔へツッと見る　ライト
玉突へ來る右太衛門眼鏡かけ　形水
たしなみもよくて素顔の二十四五　いわを
素顔では逢へない人をまたしとき　變人
鬼の首取つた氣素顔見て歸り　三巴
ほんとうの事は素顔になつて言ひ　青兒
ブブ潰が何よりうまい素顔なり　豆秋
半玉の素顔はパット買ひにゆき　同
橋筋へ來ると素顔は取まかれ　水染
三十六峯背にして素顔醉ふてゐる　同
老役の素顔やつぱり老けてゐる　亞鈍
お白粉の下に歪んでゐる素顔　同
しんみりと今宵素顔の妻と座す　同
花嫁の四五日素顔見せぬなり　三猿子
三枚目素顔になればいゝ男　同
素顔では食へない世だと女知り　同
宗教は長屋の奥でよくはやり　いわを
天理教琴も入り鉦も入り　ライト
聖書一卷只道を說き〳〵　夢裡
極樂のある宗教が賴られる　五扇子
どん底でやつとすがつた神佛　三猿子
朝飯が喰ひに行けない人の道　信一
クリスチャン御先祖からのものでなし　水染
宗教の話長男逆らはず　同
宗教を笑ふ男が出世して　變人
宗教の力に肺をぶちつゞけ　同
子が病んで妻の信心けなされず　艸樂
地藏尊子を癒し給へと背廣で來　同

宗教も金の糸目につながれる　亞鈍
宗教の否定に虚無の花咲かん　同
婚礼は五十萬圓拜まれる　三巴
錦魚屋はちっちやいやつを一つまけ　形水
錦魚鉢傍に危い三つの子　かすを
稽古屋でひやかされる錦魚うり　變人
釣り池の金魚一尾たわむれて　里十九
道ばたの水道へ錦魚荷をおろし　艸樂
錦魚二匹あと追うてゆく婆なり　葭乃
値切らずに錦魚買うてる い〜女　聞路
去年から安い錦魚は生き殘り　同
破れ傘錦魚と替へて遊ばせる　ライト
練習の網はきづきでよくすくえ　同
すき通る硝子へ錦魚はでに見へ　同
弟に馬鹿にされてるすべり臺　變人
滑り台次はブランコ母疲れ　信一
すべり台ママは上まで運ぶ役　葭乃
子を持つた倖せを知る滑り台　三猿子
滑り台入り陽をうけて二三人　三巴
スベリ台疊の破れ目立つなり　ライト
弟を先へ滑らす滑り台　いわを
さらの服着せて來たのに滑り台　水染
成績のい〜子滑り台見てるだけ　同
滑り台母の姿を見て走り　夢裡
滑り台一番うまい振りをする　同
空砲だつたピストルにおちけたり　五扇子
ピストルもぼしいと思ふ新世帶　青兒
萬一のピストルが要る身分なり　形水
ピストルの前にパジヤマが起こされる　聞路
ピストルを買ふと泥棒の眞似をする　亞鈍
ピストルを買ふて泥棒の眞似をする　同
踏込んで來てピストルは考へる　三巴
ピストルへ駄々をこねてる男の子　いわを
ピストルも玩具であつて死ぬ眞似る　ライト
ピストルは玩具だつたと知れた朝　同
ピスイルをもてあそんでる不眠症　豆秋
古本は市場の歸り途で買ひ　同
古本屋奥で主人の眼が光り　三猿子
トラックに積まれる古本とはなりぬ　豆秋
奥様の月おくれ讀む女中部屋　信一
古本の上を煙草のけむがはい　かほる
古本屋自論を吐いて賣りつける　葭乃
氣まぐれに出て古本の中に立ち　聞路
古本へ寢間の中から手を伸ばし　同
出世して見る古本のなつかしき　變人
古本の中に變屈とぢこもり　同
天才のもつ古本は光るなり　同
尉と姥の様な聾の差し向ひ　三巴
三度目に聾と知つた初對面　三猿子
押賣は聾の耳に言ひ續け　五扇子
目の前の銀貨に音のない聾　同
酔ふて來たつんぼ床の間見てるなり　かはる
たばこぼんつんぼの前に一つあり　同
悠々と聾踏切通り抜け　葭乃
片戀の聾だまつて隅にゐる　同
聾やなアと聾へ腹を立て　艸樂
なんやれと聾邪魔くさがられてゐ　同
ニヤ〜と聾わかつてゐるらしい　同
留守番の聾へ柱時計鳴る　聞路
背を丸く聾日向の中にゐる　同
聾また笑ろてゐるので笑ふなり　同
うなづいて見せる聾の哀れなり　同
聾フト自分のこと〜氣付くなり　同

阪大川柳句會　（大阪）

四月二十六日　丸島利生報

男手、役者、雜吟、本復

男手のない金持は宵を諦め　芳一
御用聞き算筍一つも舁いて呉れ　淺女
男手がすこしはほしい置屋街　同
男手に粥炊き馴れた不倖　君女
スミマヘンなと男手借りられる　路生
男手をかるとトランク素直なり　たけを
男手があるとも見えぬ喫茶店　利生
網棚の荷物をすける男の手　柳秀
男手を借ると且那に疑はれ　同
看病に男手もゐる精神科　利生
俳優を買ふに似たる銀選び　方正
役者の子無口な顔で登校し　栞
歸省の子壯士役者といふ寢起き　同
ロケ！ションがどや〜歩く花の奈良　利生
三枚目俳優と云ふ顔でなし　真三
大部屋の役者殺され續けなり　同
成駒屋ハンヤと素顔のぞかれる　路生
長火鉢女形の膝はくの字なり　輝女
殺される役に出てゐる舞臺なり　君女
喝采を浴びて敵の斷末魔　柳秀
氣味悪い金をスターは握らされ　柳秀

雁ちやんの外はどうでもいゝ舞臺　同
花道の癪は敵に巡り合ひ　同
三度目の注進槍を杖につき　同
憧れは行李の底のプロマイド　たけを
役者の子藝者の中にまぜてゐる　栗たけを
戎橋役者が通る道をあけ　柳秀
鏡臺をならべて女優ひがみ合ひ　千秋
人違ひ取つた帽子のやりどころ　路生
しかん卷すれば曳子の肩になり　たけを
夜櫻へ子のない夫婦草臥れる　路生
（長崎にて）
ヨカバッテンと運轉手バツクをし　路生
轉向に先だつものは資本にて　利生
金魚鉢一つのこつて邪魔がられ　柳秀
働いて何不足なき女房ぶり　同
かんざしに痒さをみせるなげ島田　同
散髪に今日だけあせるランデブー　同
共存共榮聲大にして慾深し　方正
春ともなれば夢の如くに龜が浮き　千秋
人間味がないと惡友評すなり　栗
本復を奇蹟の樣に醫者は云ひ　たけを
本復のお祝お茶屋からとゞき　同
本復へ又保險屋がつきまとひ　たけを
本復へ見せつける樣に酒を飲み　同
どてらなど着て本復ば呑んでゐる　路生
いづれ本復祝がさ句はせる　同
本復したらの約束を持て餘し　洗塵
錢湯で本復肌を流される　貞三
鯛なんど觸れず本復酒を飲み　方正
花のあるうちの本復祝ひにて　同
本復の祝ひに醫者も招くなり　春巢
本復の寫眞は家内中で撮り　同
本復はしたが失業待つて居る　正甫
本復のマダム朝湯へ行くと云ふ　利生
退院の荷物嬉しうまとめられ　同
本復をすれば逢ひたい一人ゐる　同
本復をすれば刑務所まつてをり　同
本復は先づ家中を見て歩き　千秋
地獄の一丁目までいたと本復大そうな　路生
本復に庭の手入れを思ひつき　路郎
本復が夕日へ涙ながす春　同
本復をして辛辣な口をきき　同

川柳雜誌社　**梅田句會**（武庫川）

水谷鮎美報

人生、女下駄、錐、浦島太郎、散髪

人生を橋の半で考へる　鳴玉
女下駄さげて夕の詫に來る　翠陽
人生のなやみ隣はポータブル　同
轉宅へ夜店の錐のまに合ふて　同
出前持ははあんと氣付く女下駄　靜波
新妻に今日錐がゐる臺所　同
養子にもならず浦島かへつて來　遊歩
人生へ阿片をすふてゐたりけり　同
浦島の家がありそな苔海の濱　由布
人生を踏みつけられて生きる顔　斗風
散髪でいぼのあるのを敎へられ　卜居
ふりきつて泣いてかへるも女下駄　同
氷割る錐きつ先にある祈り　同
ぶらりつと出て散髪をして戻り　鮎美
橋越へてくる女下駄きつい音　同
（範句）裏へ來いそらいちぢくをとつてやろ
（連想戯作）
とつてやろ澄みきる空のひとつ柿　卜居
ひとつ柿藁屋へ朝の陽があたり　翠陽
陽があたり若い姑が欠伸する　由布

川柳雜誌社　**廣島句會**（廣島）

四月二十三日　於廣鐵倶樂部

軍服、ラヂオ、野球、笑ふ、待合所

軍服の寫眞で見合日がきまり　紫涙
營門の見へて軍服別れたり　きよし
軍服を着てゐる間恐い父　枯佛
軍服の寫眞見合の役がずみ　昇玉
軍服の父へ紅葉の拳手の禮　松風
軍服の寫眞も交じる婿選み　葉留路
軍服に星が殖えたと老母へ書き　至宏
軍服の中に娘の婿が居り　同
佛檀の奥に軍服姿の子　枯佛
軍服に忠義のこゝろ包まれる　久米雄
末つ子はもう寢る時分ラヂオ切る　きよし
春の月ラヂオの歌で友と飲み　同
轉寢のラヂオしきりに話しかけ　枯佛
ラヂオだけ聞きに來られる散髪屋　葉留路
團欒の家庭ラヂオに輪をつくり　星州
素通りをさせぬラヂオの野球狂　同
ヒットヒット擴聲器の向きゐ變へ　至宏
空巢除けラヂオは早慶戰の聲　同

横飛びに駈けてショートのよいポーズ　同　久米雄

優勝旗ナインの顔に光るもの　同　久米雄

疊審の裁きみじめな顔にさせ　同　葉留路

呆氣なくピンチヒッター三振し　同　昇玉

サイレンの眞似をおどける子の野球　同　星州

三振の球はミットに突き當り　昇玉　久米雄

ネット裏子守泣く子を持てあまし　久米雄

時々は笑つて見せる萬才師　久米雄

アベックの何を笑ふか春かすみ　久米雄

笑ひ聲あとは煙草の渦をまき　枯佛

爆笑へ女氣まづく膝を寄せ　久米雄

朗かに笑つて女將猶口を受け　葉留路

いゝ仲の瞳が笑ふバスの搖れ　昇玉

笑ひ聲乘せて團體列車出る　久米雄

待合所出る汽車毎に母は問ひ　きよし

待合所娘一人が淋しさう　康津奈

悲しみと喜びを待つ待合所　松風

待合所もう二時間もあると云ひ　久米雄

戀人がまだ話してる待合所　同　葉留路

終列車犬も寢てゐる待合所　昇玉

待合所告知板など見てゝ春　枯佛

待合所時計の音を鈍く聞き　昇玉

待合所赤帽暇な水をまき　昇玉

待合所昨日の子守今日も來る　紫浪

川柳雜誌社

今治句會（今治）

三月十七日　於貯蓄銀行樓上　月原宵明報

吊革、人垣、春の草花

吊革へ和裝遠慮な手を擧げる　文庫

郊外は春吊革に汗ばむ手　香方

地下足袋に踏まれ吊革一つ替へ　宵明

吊革は車庫へ納まる搖れやうだ　同

吊革が大きくゆれて渺の畑　曉童

人垣はどつと笑つて輪がくずれ　同

人垣の中で手の筋賞められる　同

人垣を大きくさせて地圖を指し　同

猿廻しうしろの人の數も知り　仙海

人垣の後ろ自轉車の上に立ち　同

トラックが來て觀衆の輪が崩れ　宵明

人垣へ親は見えない肩車　文庫

三年目やつと此の春花になり　仙海

喰べられる草やたにしに春の唄　香方

子を連れて辨當提げて春の草　文庫

たんぽゝは鳥の呼吸のさゝくとこ　曉童

水仙の春の眞晝の陽につかれ　同

臘夜にえんどの花のある別れ　同

終風呂寢卷を下へ着て歸り　宵明

降る星へ五衛門風呂の栓を拔く　文庫

終風呂燒茅になる釣りをとり　宵明

子を二人寢かしてからの終風呂　曉童

老車夫へ極樂がある終風呂　同

團長の代筆をする告知板　宵明

告知板怒つたやうな文字を書き　仙海

電報のやうに書いてる告知板　文庫

告知板の白墨が無い花の驛　同

待つ長さ告知板まで讀み盡し　曉童

振り返り〳〵書く告知板　文庫

宵明

川柳雜誌社

鶴町句會（大阪）

三月十八日　於ライト居　宮岡白峯報

雜祭、戀敵、我慢、體温計、長男

子供等の心がおどる ひなまつり　一枝

雜祭子供の部屋に取られたり　美津夫

今年から妹がゐる雜祭　小柳子

雜祭丸髷の姉もよばれてゐ　謙公

祝い雜先づデパートを見て廻り　千兩

雜祭こんなものかと男の子　寬柳

雜祭キューピーさんものせておき　同

仲のよい子を連れてくる雜祭　變人

雜祭這ふ弟を持てあまし　ライト

力では勝てそうにない戀敵　寬柳

戀敵丸きカットの中に立ち　白峯

滿洲へ轉勤した戀敵　變人

戀敵見返すつもり金を貯め　同

戀敵チップ滅法はずむなり　ライト

我慢して世間話に聞いておく　同

乃木さんの額に我慢をして歸り　變人

腹の虫おさへる酒となつてゐる　小柳子

大聲で泣いて我慢をする氣なり　岩石

我慢する前にふすまがあるばかり　同

ヒマシ湯を飲ますと決めた體温計　變人

體温計疑れてる熱となり　寬柳

看護婦の顔に不安の體温器　千兩

體温器要らなくなつた子の寢息　白峯

全快に向ふ日向の體温計　寬柳

岩石

體温計 風邪と分つて ホットする ライト 美津夫
長男の惱みも知らず子澤山 白峯
長男は土を守つて逢者なり ライト
燒香へ先づ長男の名が呼ばれ 變人
長男が出來て心を入れかへる ライト
おとなしい氣質長男案じられ

川柳雜誌社 兵庫支部 **岬柳社句會**（兵庫）
三月二十七日 於和田宮通衛生事務所
三崎陽幸報

素人、名物、運ぶ、蕾、徽章、無言

素人の目に鹽だけの美術品 冬樹
素人の電氣工事があぶなかり 凡樂
どの趣味も素人ばなれで身が持てず 斗風
素人にも出來る道具を買ふて來る キヨシ
手傳ひ素人らしい店開き 紋太
素人のだまされそうに投資する 麥一
尻からげはい素人でございます 鮎美
素人の余分な釘は打ちたがり 某人
引越に女の運ぶものがあり 奈落
二階まで上げる机がよくあたり 秋帆
石運ぶ男のそばを春のバス 九葉
父と子と西陽へ運ぶ植木鉢 思朝
稅關を出るとトラックヒタ走り 紋太
配膳の振り袖少し邪魔になり 丹車
トラックは一臺でよし左遷の荷 冬樹
耳たぶも紅く上座へ茶を運ぶ 蘇堂
金塊を運ぶ話題はつきる晝 素生
草の根もまぜてモッコの眷へゆれ 某人
持てるだけ持つて赤帽よくあるき 苦樂公

團長は徽章の光る服で來る 蘇堂
集金に來たラヂオ屋の徽章見る 思朝
來賓の徽章をつけて又一人 紋太
團體の徽章がつゞく朝の驛 砂丘
受驗苦の夢にサンゼンたる徽章 久米雄
諸君乾坤同じ徽章が光る夜 鮎美
中學へやる子があつて徽章知る 九葉
徽章が亂れ幹事酔ふて居る 秋穗
無言の日棚からのぞく鼠の仔 鮎美
酔ふたのを無言で通す春の驛 圓車
足袋の裏の汚れだまつて座るなり 子夏
古本屋もうまけぬ氣か點り切り 某人
お役所の無言へ腹の立つ日なり 子夏
默つた男がすゝるお茶の音 九葉
何にも云はんと妻金出してくれるなり 麥一

名物だともかくふぐを喰はされる 喜山
名物の兎も角二つ三つ買ひ 久米雄
どうもつて見ても名物高になり 九葉
名物を汽車の窓から覺えたり 思朝
荒海や蟹に名のある宿の夜 某人
名物の本家が二軒出來てもめ 呑行
名物の餅付いて來る宿の膳 陽幸
竹細工足のない子の店で買ひ 子夏
レッテルが取れて名物あつけなし 鮎美
味きゝなして名物を買はされる 陽幸
名物に土產話をまぜてきく 徒歩
三分の停車名物買ひそこねず 斗風
らりつと本家が並ぶ粟おこし 苦樂公
發車する窓を名物追つて來る 同

病人へ蕾の庭を少しあけ 子夏
ふくらんだ蕾へ寒い日がつづき 圓車
其の一つ蕾で枯れた活菖蒲 遠矢太
ヒヤシンス蕾を持つた朝のお茶 蘇堂
あした頃開く蕾を買つて來る 陽幸
お別れした時の蕾が咲いてます 素生
盆栽の蕾日向へ持つて來る 陽幸
チューリップ蕾がかたい煙草店 九葉
大切な蕾をうちの子がむしり 喜山
蕾つけたまゝ芥箱に捨てられる 思朝
白椿蕾のまんま落ちるなり 同
温床を出る蕾なりいたわらう 麥一
夕顏の蕾に戀を慰ぜし灯 鮎美
吉報を待ち剃刀をあはすなり 凡樂
借金も拂ひ剃刀當てゝよし キヨシ
剃刀の切れ止む春の夜の疲れ 鮎美
全快へシレットの刄がさびて居る 某人
剃刀を研ぐ間の頰がむづがゆし 蘇堂
剃刀を研ぐ間も春の夜の床屋 九葉
剃刀へ風狂ひいて居る咳をする 子夏
剃刀の使へず髭はのびて居る 葉留路
剃刀は女の顏に輕いこと 徒歩
日々無事に日々剃刀をあはす音 某人

川柳雜誌社 **籔川今市句會**（島根縣）
四月八日 於和田居
森山さわだ報

透明、消へ行く船、吊る、上つ張り

透明の中に住んでる鯛ひらめ さわだ
名譽賞げに透明な酒であり 木馬

透明な頭腦眼鏡が光つてる　同
船は消へ波止場の風が强く吹き　木馬
消へてゆく船いつか淋しい胸のうち　同
船は消へ水平線の白い雲　同
吊革を諸手に持つて故郷の父　さわだ
わらじ四五足ゆれてゐる峠茶屋　一鴻
女給部屋古着屋程に吊つてあり　木馬
上つ張りキチンと着けて貞女なり　一鴻
事務服がずらりならんで日向ぼこ　海棠

川柳雜誌社　**御池橋小集會**（大阪）

四月十九日　於南地寧福喜

西いわを報

久振り南地の雨と酒の味　いわを
六年目昨日の樣に談し合ひ　夢裡
六年目二人の子等の父であり　青兒
地下鐵の乘場が廣い久振り　同
心四つ嬉しく融けてはづむ酒　三碧

川柳雜誌社　**梅田小集句會**（大阪）

四月廿六日　於朔風居

林朔風報

砂、カーテン、五月の花

生活の服にたまつた砂ぼこり　朔風
砂と別れて船唄と風の中　鮎美
白砂の果てなき戀の濱を行く　朔風
砂白ろく心にうつる窓硝子　鮎美
若鮎の砂をけたてゝ岩をぬけ　卜居
春の陽へ砂いつぱいの母性愛　翠陽
許嫁砂がきれいな濱に立ち　鮎美
足跡もなく砂原の五十年　朔風
漁火の足に觸れたる夜の砂　卜居
すわれゆく涙に淡き砂のいろ　朔風
アベックに砂がうれしい芦屋濱　由布
カーテンの色もうれしい新家庭　同
カーテンの影に初戀笑ふのみ　同
カーテンへおちつきのある話也　鮎美
匂ふバラ裸婦カーテンへよりそつて　卜居
カーテンを開くと月の青白し　遊歩
カーテンの窓に凭ある朝の濱　朔風
灯を消して寢るカーテンに月が冴え　遊歩
カーテンのかげに女給の眼が笑ひ　鮎美
みどりのカーテンへ肺を病む女　卜居
眞赤なカーテンへ蚊とんぼ疲れゐる　同
下駄箱へ置かれた愛のシクラメン　翠陽
啞の娘の手にしぼれたる矢車草　朔風
さゞり藤戀の二人に見あげられ　鮎美
ビルの窓五月の鉢へ水をやり　同
中年の戀に暮れゆく藤の色　由布
藤棚へ姉は人形と病んでゐる　卜居
かきつばたそれは悲しい戀でした　同
こゝからは神域と云ふ水のいろ　由布
醉ひざめへグラスの水がとぼる音　翠陽
銀鱗のひらめく水に手をひたし　朔風
死なうか知らん春の水に足をつけて　卜居
めだか、めだかこんなきれいな春の水　同
アスファルト續くところへ飲料水　由布
信心へ花たての水かへる朝　遊歩
水深し朱と綠とにんげんと　鮎美
涙曲の水にうつりし影となり　同

今治支部觀梅吟行

宵明報

四月十一日　今治水道貯水池邊

花曇り、サイレン、酒座吟

空腹へサイレン長く尾を曳いて　文庫
湯の町の戀の痛手も花曇り　香方
觀劇にプランを替へた花曇り　同
サイレンの設置村會可決する　同
花曇り腦病院に工事する　同
花曇りカンカン虫の唄をきゝ　同
サイレンを御用商人寄贈する　同
サイレンへちと慌てたる臺所　文庫
どの顏もほゝ醉つてゐる花曇り　宵明
花曇り我家の軒の低いこと　宵明
花曇り子守の故郷は山の向こ　同
花曇り外國船が入港し　香方
軍港に鳴るサイレンとスパイの眼　同
サイレンへきつちり飯を喰つてゐる　曉童
藥草も芽を出してゐる花曇り　香方
花曇り詩集を持つて家を出る　同
花曇り異人の鼻がとんがつて　宵明
花曇り電車がずらり並ぶ事故　同
サイレンへ鷄小屋も食つてゐる　曉童
花曇り洗濯物を干して留守　文庫

編輯縱橫

▲近ごろはよく雨が降る。外部の仕事をする時には雨は禁物だが、事務の仕事には雨が八ッ手の葉を濡らしてゐる靜寂さもいゝ。本號の編輯は殆んど雨の日に成つた。

▲選擧々々で、ザワ〳〵していかぬ。一寸聞きたいことがあつて警察をのぞいたら、あんたも立つんですかと聞かれた。僕はそう易々とは立たぬ。僕は政治は政治家の手に、川柳は川柳家の手にを主義としてゐる。政治家が腐つて役立たぬ時に僕は川柳淨化の一手段として自らの生存權擁護のためになら立つ。事は主として文部省內務省に屬することだ。これ以外は孜々として川柳の畑を耕すばかりだ。

▲前號で「盲人象を撫する圖」を揭げて、川柳職業人問題の序曲を發表したところが、各地の柳友から大いにやるべし、期待してゐるとの激勵に接した。理解ある柳友の反響に意を强くしてゐる。ボチ〳〵嚙んで碎いて教育する積りだ。書信を賜はつた方々に誌上で御禮を申述べる。

▲本誌のうるほひ係、大阪マンガトリオ同人の樋口ヒロム君が上京されたので、新たに甲貝スミ男君が參加された。

▲すべて雜筆を文藝春秋式に四段組にした。この方が讀みごたえがあらうと思ふ。

▲靑年詩人であり、新進川柳人である藤村亞鈍君が欺らざる告白をひつさげてデビューした。小生に觸れてある論點にはいさゝか面映ゆい處もあるが其のために一文を削ることも意味のないことだと思つて全文を揭げた。

▲柳壇の老雄、安川久留美君の述懷と、近狀報告的隨筆も又捨て難いものがある。

▲西田艸樂君の「桃太郎さん」は最近の旅からの所產であるが例によつて艸樂式カラーのもの。

▲多忙裡の福田山雨樓君からの短文「山中說法」は近ごろの珍聞である。金比古老が健在でホテルのマネージャーになつてゐるのもうれしい。

▲石田沐天君が「認識」を書くもう新進とも云へぬ同君である大いに書くべしである。

▲五月の句會から句會案內を個人的に出さぬことにしたが、こんなことには頓着せず、ドシドシ出席してくれたのでうれしかつた。個人的に案內を吳れぬから出席しないと云ふやうな柳人は來てくれなくていゝ。

▲句會方法も改正してグン〳〵

柳誌要目（四月號）

川柳徒然草　笙人（川柳みすか）
作句による眞我の發見　堀口　塊人（昭和川柳）
「柳多留」序文の研究（六）　前田　雀郎（せんりう）
日常性について（二）　鈴木小寒郎（視　野）
川柳國名盡（十三）　大田　秋水（靜岡川柳）
靜岡名所名物川柳めぐり（四）　榎田珍竹林選（靜岡川柳）
殘梅行　岸本　水府（番　傘）
岡田三面子翁と萬句合の一部　姪子省二（川柳きやり）
矢車回顧二三　森井荷十（湯の村）
江戸町奉行所の引繼　植木　鬼佛（川柳研究）
諷刺的なあまりに諷刺的な　鶴　彬（松囃子）
職業川柳人私考　鈴木小寒郎（芥子粒）
或川柳讀本抄　長谷川霜烏（みちのく）

進行させたので、みんな汗みどろになつて、息もつかずに作句した。そして改正された方法がいゝと云うことになつたので、更にいゝ方法が生れるまでは改正法でやることにした。

▲斯う句會に熱が出て來ると、會としてもウンとサービスして六月から會費も値下げ、兼題の天位には粗品を呈してその勞を犒うことにした。

▲昨夏重態、十月末床上げばしたものの半病人生活を續けてゐた葭乃が、近ごろ漸く電車にも乘れるだけの健康を取り戻したので六月には青空の下の句會へも出ると云つてゐる。僕も頭が輕くなつた。御心配をかけた方々に一寸お知らせする。

▲誌代の切れた方は至急お拂込み下さるやう營業部が切望してゐるので、どうかよろしく。小生からも特にお願ひしておく。

（路）

川柳雜誌社

六月例會

鉛筆持參

夜七時 6 六月

會場 誓得寺（電南四八八六）
大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

兼題 『鰻』三句 路郎選
『肩』三句 鮎美選

柳話 旅の事ども 西田艸樂氏

會費 二〇錢（川協會員章提示の方は一五錢）

呈賞 兼題 天位に粗品を呈す（出席者に限る）

川柳雜誌社

大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九
幹事 豆秋・いわな・ライト・よし江

★社告

▼川柳雜誌社鶴町支部の加藤ライト君が五月から不朽洞會員に橋本綠兩君の紹介で加入された。

（不朽洞會）

▼從來本社例會の會費は三〇錢であつたが、六月例會から二〇錢に値下げした。

第二回青空の下の句會

—六月十三日第二日曜—

午前十時迄に阪和電車（阿部野橋）の乘場に集つて下さい。こんどは臨南寺方面です。特に案内は出しません。雨天中止、小雨決行。兼題「冷酒」「青空」世話人（新水・艸樂・葭乃）

正誤

前號一八頁下段の「病む母へ」の作者里十九は新水の誤り。

川・雑・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但前金切手代用可）
改易、寫輔、句會案内、柳壇廣告、その他

川・雑・句・箋

「川柳雜誌」への投句は新らしく出來た桝形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利で句の見損じもなく相方に好都合であります。自分の句を尊重される意味からでも御使用をおすゝめいたします。送賃は本社で負擔いたします

八十枚綴　一冊　金十五錢
同　二冊　金廿五錢

御申込は川柳雜誌社へ
＝切手代用も可＝

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入　二拾圓・額　二拾圓
小物五圓・短冊　參圓

御申込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第一卷より第十一卷まで
各一卷　金壹圓五十錢
第十二卷及十三卷　金參圓

送料大阪市内　一冊六錢
市外　一冊三三錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の殘本が僅かばかし出て來たのでお頒ちします。日車、半文錢、路郎の三氏の句しか載つてゐない桝形四頁もの全三部で十錢、二錢切手五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

日日柳壇

大阪日日新聞の柳壇が復活しました

課題「海水浴」六月十五日
選者　麻生路郎先生

用紙は官製ハガキ
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　川柳雜誌社　麻生路郎先生（日々柳壇と記入のこと）

懸賞川柳

課題「船」六月十日
「香水」七月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏秀逸數句に謝辞を呈す

宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます

第二卷より第三卷迄　一冊　十五錢
第四卷より第十二卷迄　一冊　十錢
第十三卷　一冊　二十錢
（送料一冊一錢）

御申込は前金で川柳雜誌社へ

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌　毎月一日發行
一部廿錢・送料一錢

川柳倶樂部

東京市牛込區拂方町一四
川柳倶樂部社

川柳研究

川上三太郎大谷五花村共宰
一冊金廿一錢（郵稅共）
一年金二圓四十錢（同）
東京市王子區上十條町八五一〇
發行所　川柳研究社
振替東京九四〇四六番

川柳　きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

川柳　松囃子

毎月一日發行一部廿錢（稅共）
福岡市下店屋町九
川柳拳骨吟社

菊正宗

宮内省御用達

株式會社 本嘉納商店

社關係の人々（いろは順）

賛助員

池澤樂居　國枝史郎
長谷川一徹　藤村作
藤本卯之助
大道弘雄　穎原退藏
岡本一平　赤井清司
片岡直方　淺田一
笠原路生　末弘嚴太郎
嘉納純
田中辰二

客員

長崎柳秀　伊藤彦造
長岡半太郎　鳥山一歩
長野晴濱　沖野岩三郎

大島濤明　窪田銀波樓
大谷五花村　安川久留美
大西長三郎　前田雀郎
小川武　前田五健
食滿南北　柴谷宰二郎
川上三太郎　米村あん馬
川村花菱　篠原春雨
蛭子省二
藤里好古
小林不涙人
森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　岩崎柳路
高橋かほる　北山悟郎
水谷鮎美　大西八歩
福田山雨樓　須崎豆秋
朝田新水　毛利九波
西田艸樂　中西おさむ
姫田夕鐘　大鶴喜由
永田里十九　松下小柳子
村松夢裡　原史風
後藤青兒　關本雅幽
宮岡白峰　西いわを
近藤勇　江戸みつる
山本丹路　市塲沒食子
生田翠夢　明石柳次
★吉田水車　加藤ライト
妹尾變人
石曾根民郎

川柳雜誌社

主幹　麻生路郎

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
神戸支部（神戸市）
函館支部（函館市）　龜井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）　辻流之介
田邊支部（和歌山）　左馬
鮟川支部（島根縣）　尼緣之助
京都支部（京都市）　明石柳次
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　酒井大樓
御旅支部（大阪市）　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　山本喜山
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）　竹内機見女
今里支部（大阪市）　市塲沒食子
今治支部（今治市）　月原宵明
光笑會（大阪市）　永田里十九
伯耆支部（鳥取縣）　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）　松井可笑
十三支部（大阪市）　淺野牧人
臺中支部（臺灣）　宮内耕期
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十四卷 第八號課題

六月十日締切（十句以內）

海　大島濤明選

會計　橋本綠雨選

第十四卷第九號課題

七月十日締切（十句以內）

忘物　高須啞三味選

仲人　朝田新水選

毎號募集

近作柳樽（雜吟甘句）麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

○御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます。但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

廣告料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十二年五月廿五日印刷

昭和十二年六月一日發行

第十四卷 第六號（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番

振替穴阪七五〇五〇番

支社　東京市蒲田町女塚町二〇三

川柳雜誌社東京支社

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大賣捌大寶書店　參文社　明文堂　朝日ビル書店

其他　市內各書店（東京）かん東京堂　だ巖松堂　よう吉岡書店

あさ玉森堂　きん紀伊國屋　ぎん三味堂（神戸）　米田寶文館（函館）

くさ石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十二年五月二十五日印刷納本　昭和十二年六月一日発行　（毎月一回一日発行）

川柳雑誌　（第一六一號）　定價金參拾錢　送料壹錢

にきびとり

美顔水

▲ニキビ吹出物に第一等の良薬！

ニキビ吹出物にこれ程よく効く薬はないといはれ、種々な薬や方法で失望された方でもこの薬の効能には滿足されます。

▲美容薬として

この薬は美容薬としても非常に優れた効果がきり男子方にも婦人方にも廣く賞用せられてゐます。